

プラトン『国家』篇X卷におけるミメーシス詩拒絶の理由 (その2)※

——第二の議論 (602C-605C) と第三の議論 (605C-607A) ——

三 上 章

目 次

- V. 第一の議論 (595B-602B) (承前)
- VI. 第二の議論 (602C-605C)
- VII. 第三の議論 (605C-607A)

V. 第一の議論 (595B-602B) (承前)

プラトンは、画家の例を継続しつつ、ミメーテースについてさらに分析を進める。ミメーテースが行うミメーシスの技術（τέμπτηκή）とは何か、という問題についての分析である (598A-D)。すでに見たように、プラトンはミメーシス詩を拒絶する理由を述べるにあたり、初めに、一般にミメーシスとは何であるかという問題を探求し、次に、ミメーテースとは何者であるかという問題を探求してきた。続いてここでは、それらの探求を踏まえて、技術および知識の観点から、ミメーシスとは何であるかということを明らかにしようとする。ディアレクティケー、すなわち哲学的問答法が真実在を知ることを目指す技術であるなら、ミメーティケー、すなわち模倣の技術は何を知ることを得させる技術なのだろうか？

プラトンは『ソピステス』の終わりの部分 (265A-267B) において、ソフィストの技術に関連する分類を提示している。すなわち、技術には獲得の技術と作る技術とがあるが、ソフィストは後者に関わる。作る技術には神

的なものと人間的なものとがあるが、ソフィストは後者に関わる。人間的な技術には実物を製作するものと影像を製作するものとがあるが、ソフィストは後者に関わる。影像を製作するかぎりでは、それはミメーシスの技術である。この影像を製作する技術には、似像 (*εἰκόνες*) を作るものと見かけだけの像 (*φαντάσματα*) を作るものとがあるが、ソフィストは後者に関わる。見かけだけを作る技術には、絵画や彫刻のように道具を使うものと自分自身の声や体を使うものとがある。後者はいわゆる物真似であり、ソフィストがそれに属する。つまり、ソフィストの技術は、ことさらにミメーシスに関わる技術なのである¹。このミメーテースとしてのソフィストのあり方が、プラトンがミメーテースとしての詩人について語るとき、彼の念頭にあったであろう。プラトンは、第Ⅱ巻においてミメーテースに属する人たちとして画家や詩人たちを挙げたが²、彼の見るところ、ソフィストもその類に属する。

さて、画家が真似て描写する対象は、エイドスではなく、職人たちが作った製作物のほうである。しかも、実際にあるものがあるがままに真似て描写するのではなく、見える姿を見るがままに真似て描写する。絵画とは、見かけを真似る描写なのである。ミメーシスの技術が触れる能够性のあるのは、それぞれの対象のほんのわずかの部分であり、しかもそれは見かけだけの影像にすぎない。だから

キーワード：プラトン、国家、ミメーシス、ホメロス、哲人統治者

こそ、いわば「すべてのもの」を作り上げることができる³。プラトンは次のような例をあげる。

οῖον ὁ ζωγράφος, φαμέν,
ζωγραφήσει ἡμῖν σκυτοτόμον,
τέκτονα, τοὺς ἄλλους δημιουργούς,
περὶ οὐδενὸς τούτων ἐπαίσχων τῶν
τεχνῶν· ἀλλ’ ὅμως παιδάς γε καὶ
ἄφρονας ἀνθρώπους, εἰς ἀγαθὸς εἴη
ζωγράφος, γράψας ἂν τέκτονα καὶ
πόρρωθεν ἐπιδεικνύς ἔξαπατῷ ἂν
τῷ δοκεῖν ως ἀληθῶς τέκτονα εἶναι

たとえば画家は、とわれわれは言おう、われわれに靴作りや大工やその他の職人を絵にかいてくれるだろう。これらの人たちの技術の何一つについても専門知識をもたないのにね。それにもかかわらず、彼が上手な画家であるなら、少なくとも子どもたちや思慮のない人たちに、大工の絵をかいて遠くから示し、ほんとうに大工であると彼らが思うようにだますであろう⁴。

プラトンはミメーシス詩、特にホメロスのそれを念頭に置いてこれを語っている。ホメロスとその詩が、個人と社会のあり方に悪い影響を及ぼしているという認識がそこにある。ミーテースとしとての画家およびその技術について、何が問題であるかといえば、「靴作りや大工やその他の職人」を本物そっくりにかくことにある。たとえば、大工の絵をかいてみせて、「子どもたちや思慮のない人たち」に本物の大工であるかのように思わせることができ、すなわち、見かけだけの影像を実物であるかのように思わせることができる問題なのである。画家はあくまでもミーテースにすぎず、大工の技術について何一つ専門知識をもっていない。それにもかかわらず、かかれた大工の絵は、識別力を欠く人たちには、あたかもその画家が大工の技術を熟知しており、大

工であるかのような錯覚を与える。つまり、大工の技術に関しては、いわば見かけの影像にすぎない画家が、あたかも彼が大工自身であるかのように思い誤らせてしまう。『ソピステス』においても、画家は、自分がかいた「似姿」(μιμήματα)によって、知恵の行かない幼い子どもたちをだまして、彼は何でも実物を作ることができると思わせることができると語られている⁵。言及されているのは、当時流行した「板絵」(テムペラ画及び蠍画)のことであろう。このジャンルの画家たちは、錯覚に重きを置き、色彩、光と陰による立体効果、短縮法、及び精緻な仕上げによって、見る者に幻覚を起こさせることをねらった。たとえば、「葡萄と鳥」という有名なだしま絵があったと伝えられる。大ピロストラトスの著書『絵画』第I巻23節に、絵にかいた花に一匹の蜂がとまった話が出てくる。本物の蜂が花の絵にだまされたのか、それとも蜂の絵が見る人をだますほど真に迫っていたのかという話である⁶。T. B. L. Websterの研究によると、前425–370年は、歴史の激変を背景として、芸術も変化し、自由な様式が興った時代である⁷。絵画においては、情緒と写実が強調されるようになった。板絵の巨匠たち、ゼウクシスやパラシオスの作品は、前427年に生まれたプラトンの少年時代から中年時代にかかれたものである。プラトンのソクラテスは、ゼウクシスの「理想のヘレン」という絵や、「影絵」(σκιαγραφία)という専門用語を知っていた。これら遠近法によってかかれた画は、エーツや理性にではなく、パトスに訴えることを目的とした。アテナイには遠近法画の巨匠、アガタルコスのような人物が活躍した。Websterは、そのような画が子どもに与えたであろう影響の例として、アルキビアデスの家の食堂に板画を飾った画家が、もしもアガタルコスであったならばという仮定の話を語る。すなわち、アガタルコスは、現実の饗宴であるかのように思われる

幻想上の空間感を与えるため、遠近法を用いて、寝椅子に横たわる醉客たちを壁一杯にかいたであろう。仮に子どものプラトンがこの家に行き、本当の空間であるかのように見えた壁絵に手を触れてみたと想像しよう。実は壁が平らだとわかったときの幻滅はどれほどだったことだろう。そういう仮定の話である⁸。ミーテースとしての画家は、似姿によって欺く者であり、ミーテースとしてのソフィストは偽りの言葉、すなわち、偽りの教養や論駁によって欺く者であり、ミーテースとしての詩人は偽りの言葉、音楽、踊りを総動員して欺く者である。ミーテースとしての詩人は、視覚にも聴覚にも訴えて欺く。そのかぎりでは、視覚のみに訴えるミーテースとしての画家よりも、人々に与える影響は大きい。ミーテースとしての詩人は、言葉だけではなく音楽や踊りおよび舞台の背景画などを総動員するゆえに、幼い子どもにもわかりやすいので、人間発達の初期段階から影響を与えることができる。それに比べ、言葉のみを用いるソフィストが影響を与えることができるのは、人間発達のもっと後の段階においてである。

「子どもたちや思慮のない人たち」（παιδάς γε καὶ ἄφρονας ἀνθρώπους）は、先に語られた、治療薬として、ミメーシス詩の本質に関する知識をもっていない人々に対応するであろう⁹。プラトンのムウシケー生涯教育課程で言えば、中等教育課程の中にいる若者たちに相当する。彼らは、エーツの学習を主とする初等教育課程を修了し、現在は、将来のディアレクティケー学習の準備として、理性を育てる数学的諸学科の自由な学習を始めたばかりか、あるいはその途上にある生徒たちである。エーツの段階からロゴスの段階へと着実に進んでいく必要がある彼らにとって、ミメーシス詩とそれがもたらす影響は、進歩の妨害であり、むしろ退歩させるものである。彼らは途上にある以上、いまだ「知識」（ἐπιστήμη）と、

「無知」（ἀνεπιστημοσύνη）と、「ミメーシス」（μίμησις）との、区別がつかない人たちである¹⁰。それゆえ、ミーテース中のミーテースである詩人が、ミーティケー中のミーティケーであるムウシケーの諸技術を駆使して、ありとあらゆる影像をつくり出すとき、ミメーシスの本質を知らない若者たちは、実物ではないそれらを実物であるかのように容易に欺かれうる。ミーテース詩人が、オイデュプス王やアガメムノン王の影像を作ると、識別力のない若者たちは、それらの影像によって、詩人がさぞかし人間や人生について多くのことを知っているかのように欺かれうる¹¹。影像の製作者にすぎず、製作者の名にさえ値しない「呪術師・ミーテースの輩」（γόντι τινι καὶ μιμητῇ）を、あたかも「何でも知っている人」（πάσσοφος）¹²であるかのように思い込まされるのである¹³。ミーテースとしての詩人は、呪術師のように魔法の薬を用いて、何でも知っている人に変身して、その人を演じることにより¹⁴、若者たちを欺く。その魔法の薬とは、ミメーシス詩である。ミーテース詩人は、ソフィストのように何でも知っている人のごとくに演じる。知を愛し求める哲学者を演じることはもとより、本当の知者である神をも演じるのである。プラトンの見るところでは、これがミーテース詩人とミメーシス詩の本質である。だまされないためには、X卷の冒頭で言及されたように、このようなものとしてのミメーシス詩の本質を知る知識を、「治療薬」（φάρμακον）¹⁵としてもっている必要がある。

ミメーシス詩とミーテース詩人の本質を解明しようとするプラトンの議論は、以上の通りである。この議論を経た上で、今や彼は心を決めて、「悲劇と、悲劇の指導者であるホメロス」（τὴν τε τραγῳδίαν καὶ τὸν ἡγεμόνα αὐτῆς Ὁμηρον）に対する批判の作業に進む¹⁶。彼の批判は、ミメーシス詩とミーテース詩人の代表者としてのホメロスに対するもので

ある。その批判は、ホメロスへの愛と畏敬よりも「真理」が尊重されなければならない、という判断に基づく¹⁷。

οὐκοῦν, ἦν δ' ἐγώ, μετὰ τοῦτο
ἐπισκεπτέον τήν τε τραγῳδίαν καὶ
τὸν ἡγεμόνα αὐτῆς "Ομηρον, ἐπειδή
τινων ἀκούομεν ὅτι οὗτοι πάσας μὲν
τέχνας ἐπίστανται, πάντα δὲ τὰ
ἀνθρώπεια τὰ πρὸς ἀρετὴν καὶ
κακίαν, καὶ τά γε θεῖα· ἀνάγκη γὰρ
τὸν ἀγαθὸν ποιητήν, εἰ μέλλει περὶ
ῶν ἄν ποιῆι καλῶς ποιήσειν, εἰδότα
ἄρα ποιεῖν, ἢ μὴ οἶόν τε εἶναι ποιεῖν.

したがって、とぼくは言った。次に、かの悲劇とその指導者であるホメロスを吟味しなければならない。というのは、われわれは、ある人たちが次のように言うのを聞いているからだ。すなわち、こういった詩人たちは、一方において、ありとあらゆる技術を知っており、他方において、徳と悪徳に関する人間のことがらのすべてを、さらに神のことがらまでも知っている。なぜなら、かのすぐれた詩人は、どんなことでもあれりっぱに作ろうとするのであれば、必ずそれらを知っていて作るはずである。さもなければ、作ることはできない¹⁸。

「ある人たち」(τινων)とは、特定の人たちを指すのではなく、すぐ後で「大衆」(τοῖς πολλοῖς, 599A)と言い換えられていることから示唆されるように¹⁹、当時の一般の人々に言及するものであろう。一般通念によると、ホメロスは、①ありとあらゆる技術を知っている、②徳と悪徳に関する人間のことがらのすべてを知っている、③神のことがらまでも知っている、と信じられていた²⁰。その理由として、「かのすぐれた詩人」(τὸν ἀγαθὸν ποιητήν)であるホメロスは、どんなことでも「りっぱに作る」(καλῶς

ποιήσειν)にあたっては、必ずそれらを「知っていて」(εἰδότα), 作った「はず」(ἀνάγκη)であるという憶測が挙げられている。しかし、プラトンの考えによると、ホメロスがすぐれた詩人であり、りっぱに詩を作るという思いなしは、正しくない。その形容詞と副詞にふさわしいのは、哲人統治者だけである。ホメロスがあらゆることがらについて知っていて、という思いなしも、正しくない。その言葉がふさわしいのは、やはり哲人統治者だけである。ミメーテース詩人の「知識」は、哲人統治者の知識に遠く及ばないことはもとより、その他の各専門家の知識にも及ばないものであった。それは、いわば「想像上の理解」²¹であり、知識の名に値しないものであった。ミメーテース詩人は、何かを知っているのではなく、何かを知っている人を想像し、空想するだけである。したがって、彼が「作る」ものも、専門家や哲学者が作るもの「見かけの姿」(φαντάσματα, 599A), あるいは「影像」(τὸ εἰδωλον, 599A)にすぎない。つまり、作るのではなく「真似る」だけである。いかにホメロスが医者を巧妙にかき、それゆえ医者の知識と技術をもつよう見えてても、それはみせかけである。それゆえ、ホメロスは人を治療することもできなかつたし、治療の知識を他者に伝授することもできなかつた(599C)。いかにホメロスがすぐれた国家統治者や教育者を巧妙にかき、それゆえ人間のアレテーを知っているかのように見えてても、それはアレテーの影像を真似てかいでいるだけで、アレテーそのものには少しも触れていない。それゆえ、彼はアレテーをもつ人間を作ることができなかつたし、他者に影響を与えて、「ホメロス的な生の道のようなもの」(ἀδόν τινα . . . βίου Ομηρικήν, 600B)を継承する学派を作ることもできなかつた(599D-600E)。要するに、ホメロスを始めとするミメーテース詩人たちは、教育に関しては、すぐれた人間をも、すぐれた国家を

も形成する眞の知識をもたない。「アレティーの諸影像をミメーシスする人々」（μιμητὰς εἰδώλων ἀρετῆς, 600E) が、彼らの正体である，とプラトンは言いきる。

それにもかかわらず，なぜ大衆はホメロスに欺かれるのだろうか？ プラトンは再び画家のたとえに戻り，ミメーシス詩がもつ欺きの性格を明らかにしようとする。

οἶωγράφος σκυτοτόμον ποιήσει
δοκοῦντα εἶναι, αὐτός τε οὐκ ἐπαίσων
περὶ σκυτοτομίας καὶ τοῖς μὴ
ἐπαίσουσιν, ἐκ τῶν χρωμάτων δὲ καὶ
σχημάτων θεωροῦσιν;

οὔτω δὴ οἴμαι καὶ τὸν ποιητικὸν
φήσομεν χρώματα ἄττα ἑκάστων
τῶν τεχνῶν τοῖς ὀνόμασι καὶ
ρόήμασιν ἐπιχρωματίζειν αὐτὸν οὐκ
ἐπαίσοντα ἀλλ’ η μιμεῖσθαι, ὥστε
ἐτέροις τοιούτοις ἐκ τῶν λόγων
θεωροῦσι δοκεῖν, ἔάντε περὶ
σκυτοτομίας τις λέγη ἐν μέτρῳ καὶ
ρύθμῳ καὶ ἀρμονίᾳ, πάνυ εὖ δοκεῖν
λέγεσθαι, ἔάντε περὶ στρατηγίας
ἔάντε περὶ ἄλλου ὁτουοῦν· οὔτω
φύσει αὐτὰ ταῦτα μεγάλην τινὰ
κήλησιν ἔχειν. ἐπεὶ γυμνωθέντα γε
τῶν τῆς μουσικῆς χρωμάτων τὰ
τῶν ποιητῶν, αὐτὰ ἐφ' αὐτῶν
λεγόμενα, οἵματι σε εἰδέναι οἷα
φαίνεται. τεθέασαι γάρ που.

画家は一人の靴作りと思われる者を作るであろうが，彼自身は靴を作ることについてわかっていない。しかも，靴を作ることについてわかっておらず，もろもろの色や形によって鑑賞している人たちに対して，それを作るのだ。

まさに同様に，ぼくが思うには，かの詩人も，それぞれの技術について，語句を使ってさまざまな色を塗り描くのだと，われわれは

主張することにしよう。彼自身はそれらの技術についてわかっておらず，ただ真似ているだけなのだ。しかし，その結果はと言えば，言葉によって鑑賞しているこれらの他の人たちには，だれかがメトロンとリュトモスとハルモニアを用いて，靴を作ることについて語るならば，まったくよく語られているように思えるのだ。あるいはまた，軍の統率であれ，他のどんなことについても同じだ。それほどまでに，こういった音楽的要素はそれら自体が，本来，何か大きな魅惑力をもっているのだ。というのは，現に，これら詩人たちの作品がムウシケーのさまざまな色をはぎ取られ，語句がそれら自体で語られるなら，どのように見えるかは，君は知っていると思う。見たことがあるだろうからね²²。

ミメーテース詩人は，人間のアレティーを何一つ知らないにもかかわらず，語句という色を使って人物を描くことができる。しかも，詩の語句にはメトロン，リュトモス，ハルモニアといった多彩な音楽的要素が伴う。それらには何か呪術的な魅惑力（κήλησιν）が備わっており，人間の魂に対していかに大きな影響を及ぼすかについては，すでにⅡ～Ⅲ卷において語られたとおりであり，また，本論文の第Ⅷ章で論じたとおりである。ここに大衆を欺くものとしてのミメーシス詩の本性がある。ほんとうはすぐれたものではない語句を，音楽的諸要素が引き立てているだけなのにもかかわらず，大衆はそれらに欺かれ，すぐれたものではない語句をすぐれているもののように思いなすのである。ホメロスも大衆も，真実に見える偽りを愛する者たちであり，真実そのものには愛着を寄せない。彼らは美しい語句，声，歌，踊りによって装われた詩には愛着を寄せるが，<美>そのものには愛着を寄せない。V卷において，あちらこちらで開催される演劇公演に駆けずりまわる人たちが，一般に哲学者だと思われる向きがあ

るということが語られた。しかし、実は、彼らは「哲学者たちに似ている者たち」(όμοιούς φιλοσόφοις) にすぎなかった。眞の哲学者たちは、「眞実を見る愛する人たち」(τοὺς τῆς ἀληθείας.. . φιλοθεάμονας) であった²³。

結局のところ、ホメロスに代表されるミーテース詩人、すなわち「影像を作る人」(τοῦ εἰδώλου ποιητής) がもつとされる「知識」とは、「あるもの」(τοῦ ὄντος) については何も知らず、「見えるもの」(τοῦ δε φαινομένου) について知っているということにすぎない²⁴。そのようなものは知識の名に値しない。このことを明らかにするために、プラトンは、「三種類の技術、すなわち、使うための技術、作るための技術、真似るための技術」(τρεῖς τέχνας.. . χρησιμένην, ποιήσουσαν, μιμησομένην, 601D)を、例として取り上げる。すなわち、道具にせよ、動物にせよ、人間の行為にせよ、それぞれのものの「卓越性や美しさや正しさ」(ἀρετὴ καὶ κάλλος καὶ ὁρθότης)は、三種類の技術の中のどれに関わるのだろうか？ プラトンの考えでは、使うための技術に関わるのである。なぜなら、それぞれのものを「使う人」(τὸν χρώμενον)こそが、最もそのものに通じており、それゆえ、どのようなところが善いか悪いかを「製作者」(τῷ ποιητῇ)に指示することができるからである。プラトンは、アウロス演奏の技術を例に取り上げる。すなわち、どのアウロスが実際の演奏のために善いか悪いかを知っており、どのようなアウロスを作らねばならないかを指示することができるのは、アウロス奏者(αὐλητής)である。アウロス製作者(αὐλοποιός)は、アウロスの目的である実際の演奏に関しては、専門家ではないのだから、アウロス奏者の指示を信じて、それに従うだけである。つまり、製作者がもつものは、せいぜい「正しい信念」(πίστιν ὁρθήν)にすぎず、「知識」(ἐπιστήμην)

の保持者と言えるのは、使用者のほうである。では、ミーテース詩人はどうだろうか？ たとえば、人間の行為の「美しさや悪さ」(κάλλος ἢ πονηρίαν)を知る知識をもっていると言えるだろうか？ ミーテース詩人は、そのような知識をもたないことはもとより、そういうことがらについて正しく思ふくすることすらできない²⁵。ここでプラトンがアウロス奏者の例を取り上げるには、理由があると思われる。『国家』第Ⅲ卷では、「アウロス製作者たちやアウロス奏者たち」(αὐλοποιοὺς ἢ αὐλητὰς, 399D)は、浄化された国家に必要とされる節度あるハルモニアに違反するような演奏に加担するからとの理由で、その国への受入を拒絶された。ミーテース詩人は、知識に関しては、かのアウロス奏者にすら遠く及ばない。それだけではなく、正しい思ふくに関しても、アウロス製作者にすら及ばない。結局のところ、ミーテース詩人である悲劇作家たち、および、その筆頭のホメロスは、「言うに値することを何一つ知っていない」(εἰδέναι ἄξιον λόγου, 602B)。「彼らのミーテースは、遊びのようなものであり、真剣に従事することではない」(εἶναι παιδιάν τινα καὶ οὐ σπουδὴν τὴν μίμησιν, 602B)という結論になる。

VI. 第二の議論 (602C–605C)

プラトンがミーテース詩拒絶の理由として展開する第二の議論は、ミーテース詩が魂における劣った要素を助長し、理知的要素を滅ぼしてしまうというものである。議論は、「それは（真似るということ、μιμεῖσθαι），それがもっている力を人間に属する諸要素の中のどのようなものに対して及ぼすのだろうか」(πρὸς δὲ δὴ ποιόν τί ἐστιν τῶν τοῦ ἀνθρώπου ἔχον τὴν δύναμιν ἦν ἔχει;, 602C)という問い合わせ始まる。プラトンは、視覚を例として取り上げ、それが錯覚によって数学的測

定に反する判断を起こしやすいことを語る。これにより、人間の内には、数学的測定に従つて判断をする理知的要素とは別の、それに反する要素があることがわかる。前者は「魂の最高の一要素」（βέλτιστον τῆς ψυχῆς）であり、後者は「われわれの内にある劣った諸要素の中の何か」（τῶν φαύλων τι ἐν ἡμῖν）である²⁶。劣った諸要素とは漠然とした言い方ではあるが、プラトンがここで問題としていることは、人間の魂の内には、理知的要素に反する何か非理知的要素が存在するということであろう。しかし、それがミメーシスの技術とどういう関係をもつたのだろうか？

ἡ γραφικὴ καὶ ὅλως ἡ μιμητικὴ πόρρω μὲν τῆς ἀληθείας ὃν τὸ αὐτῆς ἔργον ἀπεργάζεται, πόρρω δ' αὖ φρονήσεως ὄντι τῷ ἐν ἡμῖν προσομιλεῖ τε καὶ ἐταίρα καὶ φίλη ἐστὶν ἐπ' οὐδενὶ ὑγιεῖ οὐδὲ ἀληθεῖ.
.....
παντάπασιν, φαύλη ἄρα φαύλῳ συγγιγνομένῃ φαῦλα γεννᾷ ἡ μιμητική.

絵画術、および一般にミメーシスの技術は、一方では、真実から遠く離れているものとして自分自身の作品を完成し、他方ではまた、われわれの内にある思慮から遠く離れた要素と親密に交際し、なおかつ健全でも真実でもないことのための遊女・女友だちである。

.....

どう見ても. . . したがって、ミメーシスの技術は劣った者であり、劣った者と一緒に寝て、劣った子どもたちを生むのである²⁷。

「われわれの内にある思慮から遠く離れた要素」（πόρρω δ' αὖ φρονήσεως ὄντι τῷ ἐν ἡμῖν）は、われわれの内にある劣った要素、すなわち、非理知的要素を言い換えたものである。ミメーシスの技術の働きかけを受けるのは、他で

もなくこの要素である。「親密に交際する」（προσομιλεῖ），「遊女・女友だち」（ἐταίρα καὶ φίλη），「一緒に寝る」（συγγιγνομένη）は、いずれも性的関係を想起させる用語であり、いかにこの要素がミメーシスの技術から強い影響を受けるかということを示唆する²⁸。「劣った子どもたちを生む」という表現も、この要素が影響を受けるとき、その影響はひとりこの要素だけにとどまらず、他者に波及していくことを示唆する。「劣った子どもたち」（φαῦλα）という用語は、非嫡出子を示唆する。

以上において見たのは、遊女・女友だちにもたとえられるミメーシスの技術と、魂における非常にそれからの影響を受けやすい要素との交際の話である。これに基づき、プラトンはさらにミメーシスの技術をミメーシス詩に特定し、「詩のミメーシスの技術が親密に交際するところの他でもなく心のその要素」（αὐτὸ . . . τῆς διανοίας τοῦτο διαστιλεῖ ἡ τῆς ποιήσεως μιμητική, 603C）を取り上げ、それが劣ったものか、それとも優れたものかを吟味することに取りかかる。まずプラトンは、心の中にそのような要素があることを確認するために、ミメーシス詩はどのような場面を真似て描写するのか、そしてそれにさらされるとき、人間はどのような反応をするのかについて語る²⁹。「心」（τῆς διανοίας）は魂全体を表す用語であり、X卷の冒頭における「どうやらこういったすべてのものは、聴いている人たちの心を損なうものようだ」（λώβῃ ἔοικεν εἶναι πάντα τὰ τοιαῦτα τῆς τῶν ἀκουόντων διανοίας, 595B）の用法に対応する。ここでは、プラトンは魂の部分化について慎重であることが見て取れる。ミメーシス詩が真似て描写するのは、「強制された行為、あるいは自発的な行為を行っている人間たち」（πράττοντας . . . ἀνθρώπους μιμεῖται ἡ μιμητική βιαίους ἢ ἔκουσίας πράξεις）である。プラトンはIII卷399A-Cにおいて、この二つの範疇をハルモニアの種類

との関連において語った。そこでは、戦争をはじめとする強制された行為にあって、勇敢に行動する人を描写するハルモニアと、平和時に強制されてではなく自発的に行う行為にあって、節制をもって行動する人を描写するハルモニアとが、国家に採用されるべきであることが語られた。一方で、勇敢な、あるいは節度ある行為をなした人は、その首尾に満足することができるため、喜ぶ人として描写され、他方で、臆病な、あるいは節度のない行為をなした人は、その首尾に満足することができないため、嘆く人として描写される。それゆえ、勇気に対応するハルモニアと、節制に対応するハルモニアとが、国家に保持されなければならないというのが、その箇所の趣旨であった。プラトンが、X巻のこの箇所で問題にするのは、悲劇などにおいて演じられる演技に、聴衆がどのように反応するかということである。もちろん勇気ある行為や節度ある行為を見聞きして、それに感化される場合もあるだろうが、問題は、臆病な行為や節度のない行為を見聞きして、それに感化される場合もありうるということである。さまざまなかいに遭遇するとき、人間はいつも「一つの心である」(ὁμονοητικῶς ἀνθρωπος διάκειται, 603C) ことは難しく、あちらこちらと揺れ動く。それはいわば心の中の「内戦」(στασιάζει τε καὶ μάχεται, 603D) であり、人間には避けられないものである。ここでプラトンが吟味するのは、作品の中で勇気ある行為や節度ある行為をなす人、およびそれを観る聴衆の心の動きである。作中の「すぐれた人物」(ἀνήρ ἐπιεικής, 603E) が、最愛の人を失うといったような悲運に遭遇するとき、それを他のだれよりも平静に耐え忍ぶとしても、それは悲しくないということではなく、人々の前では節度をもって悲しみに耐えているということなのである。自分一人きりになったときには、人に聞かれたら恥ずかしいような振る舞いをすることもありうる。他方、聴衆の側

に立つなら、すぐれた人であっても人間であるかぎり、悲しい場面を観るとき、心を動かされずにはいられないであろう。特に、ものごとに感じやすい年頃の若者にとってはそうであろう。たとえ大勢の面前では悲しみに耐えて、節度を保つとしても、自分一人きりになったときにはどうであろう。思う存分悲しみにひたるのではないだろうか。ムウシケー生涯学習における中等教育の段階にある若者たちを考えてみよう。彼らは音楽・文芸としてのムウシケー初等教育における性向・品性(エーツス)の学習を修了し、今や数学的諸学科としてのムウシケー中等教育の中にあり、理性(ロゴス)の涵養に励んでいるところである。彼らの中に形成されつつあるロゴスは、悲しみに抵抗しそれを抑制するように、彼らを励ますであろう。プラトンは、「ロゴスとノモス」が励ますという表現を用いる。ノモスへの言及は、アテナイにおいては公的な哀悼は抑制しなければならないと定めたソロンの法令を意識しているかもしれない³⁰。しかし、そうであっても他方、悲しみへ引きずろうとする、「まさしく当の情動」(αὔτὸ τὸ πάθος) が存在することも否むことはできない。のことから、人間の中には相反する二つの要素が、同時に存在することが明らかである。すなわち、ロゴスとノモスに従おうとする要素と、パトスに従おうとする要素である。前者は「最善の要素」(τὸ βέλτιστον) であるのに対して、後者は「非理性的要素」(ἀλόγιστόν) である。やっかいなのは、この要素である。それは人間に悲しみや苦しみを思い出させ、嘆きへと導き、いつまでもひたらせようとする。プラトンによると、この「悲嘆・怒りに引きずられやすい要素」(τὸ ἀγανακτητικόν, 604E)³¹ が、ミメーシス詩にとって格好の材料であり、作家たちはそれを多数かつ多彩な形で描写することができるのである。他方、「思慮深く平静なエーツス(気質・品性)」(τὸ δὲ φρόνιμόν τε καὶ ἡσύχιον

ἥθος) は、つねに同一性を保つため、真似て描写するのが容易ではないし、演劇を観に来る大衆にも理解されにくい。それゆえ、大衆の評判を得るために、ミメーシス詩人たちは、「悲嘆・怒りに引きずられやすく、移り変わりやすいエーストス」(τὸ ἀγανακτητικόν τε καὶ ποικίλον ἥθος, 605A) を真似て描写することに専念するのである。哲人統治者を目指しつつ、ムウシケー中等教育を受けている若者たちの心の中にも、大衆に迎合し、大衆を欺くこのエーストスが存在しており、これが数学的諸学科としてのムウシケー教育によるロゴスの学習に対して妨げとなる。

ミメーシス詩が人間の中のどのような要素に影響を及ぼすかが、今や明らかになった。それが影響力をもつのは、「魂内の最善とは別の要素」(ἔτερον τοιοῦτον . . . τῆς ψυχῆς, 605A) に対してである。ここでも、この要素が何であるかは明確に説明されていないが、大事なのは、この要素がロゴスに反抗するということである³²。ミメーシス詩人は、この要素を目覚めさせ、増長させ、これを強いものにすることによって、理知的要素を滅ぼしてしまう。ここに、プラトンがミメーシス詩人を彼の理想国に受け入れない正当の理由がある。その国家は、「まさにノモスが統治しようとしている国家」(μέλλουσαν εὐνομεῖσθαι πόλιν, 605B) である。ミメーシス詩によって人間の内なる非理知的要素を増長させることは、いわば国家においてならず者たちを統治者となし、より教養のある人たちを滅ぼすようなものである。つまり、「ミメーシス詩人は、それぞれの人のかけがえのない魂の中に悪しき国制を作り上げる」(τὸν μητητικὸν πιοπτὴν . . . κακὴν πολιτείαν ιδίᾳ ἐκάστου τῇ ψυχῇ ἐμποιεῖν, 605B) のである。彼は、哲人統治者を目指している、ムウシケー生涯学習の中等段階にある若者に対して、その「魂の思慮を欠く部分におもねる」(τῷ ἀνοιήτῳ αὐτῆς χαριζόμενον, 604B) ことによって、そ

のロゴス学習を妨げ損なうことを心配する。そこに、プラトンはミメーシス詩人の危険を察知する。

さて、以上において見たところの、魂を理知的な要素と非理知的な要素の二つの観点から見る見方は、IV卷等における魂の三部分説と矛盾するように思われるかもしれない。両者の関係をどのように考えたらいいのだろうか？ Cornford は、X卷の二部分説（最善の部分と劣悪な部分=快苦（喜怒哀樂）の部分）がプラトン本来のものであり、IV卷等における三部分説は、国家における三階層区分に合わせてつくり出されたものである、と考える³³。すなわち、気概の部分は軍人階層に合わせて作られたものであり、二部分説では、気概の部分は劣悪な部分に含まれる。知恵、勇気、節制の三アレティーは、本来、年齢による社会階層の区分に対応するものだった。国家には老年、成人男子、子どもの三つの社会階層があった。それぞれの階層には、特有の役割があり、それゆえ特有のアレティーがあつた。すなわち、老年には知恵が、成人男子には勇気が、子ども（と女性）には節制が求められた（435E, 544D）。特に節制は、子どもから大人になりかけの若者（μειράκιον）に固有のアレティーとみなされた。魂の部分の観点からは、知恵は理知的部分に対応し、節制は欲望的部分に対応する。したがって、勇気に対応する部分も必要となり、プラトンはそれに対応するものとして気概の部分を発明した、とConfordは考える。これに対して、Murphyは、魂はいくつの部分に分けられるのかという観点からではなく、魂内のどの要素が分けられるのかという観点から考える³⁴。すなわち、その分けられる要素とは、魂における理知的要素（τὸ λογιστικόν）であり、X卷で語られる「われわれの中にある劣った要素」(τὸ φαῦλον ἐν τῷ, 602C-605C) とは、理知的要素が細分化されたものである。しかし、それは知性に対する感覚という細分ではなく、

感覚と感情に対して理知的部分が正しく働いていない状態を表す。本来、理知的な部分はたえず天の範型を見つづけることによって、その抑制力を發揮すべきであるのに、それを怠るときに陥る望ましくない状態、それをプラトンは「われわれの中にある劣った要素」と表現する、とMurphyは言う。Burnyeatも、「われわれの中にある劣った要素」を、理知的要素の機能が不完全な状態を指すと解釈する。そうすると、魂における理知的部分と欲望的部分の対立という構造になる。しかし、それは、プラトンがIV巻において論じた魂の三部分説を放棄し、X巻において新たに二部分説を提起したということではなく、三部分説に対する新たな観点からの補足である、とMurphyは考える³⁵。すなわち、IV巻は、相対立する動機という観点からの区分であるのに対して、X巻は、魂の理知的部分における相対立する認識という観点からの区分である。後者は前者と矛盾するものではなく、前者に対する新たな付加である。プラトンはIV巻における魂の三部分説を踏まえて、X巻における二部分説を展開しており、むしろ、X巻においては、三部分説と二部分説とが融合している。この融合という線でMurrayも、X巻の二部分説を理解する³⁶。ただし彼は、「われわれの内にある劣った諸要素の中の何か」(τῶν φαύλων τι ἐν ἡμῖν, 603A7)を、理知的部分における劣った要素とみなす上記の見解には賛成しない。603A12-B1とB4以下において、この要素に対して揶揄の表現が使われているが、理知的部分に対してプラトンはそのような表現を用いるだろうか？ また、605A9-B6においては、「魂の劣った要素」(τοῦτο τῆς ψυχῆς)は、「理知的部」(τὸ λογιστικόν)と強く対比されている。プラトンは、603C-Dにおいて「詩のミマーシスの技術が親密に交際するところの、他でもなく心のその要素」(αὔτὸ . . . τῆς διανοίας τοῦτο φη προσομιλεῖ ή τῆς ποιήσεως μιμητική, 603C)

を吟味するにあたり、次のように語る。

ἐν γὰρ τοῖς ἄνω λόγοις ἵκανως πάντα ταῦτα διωμολογησάμεθα, ὅτι μυρίων τοιούτων ἐναντιωμάτων ἄμα γιγνομένων ή ψυχὴ γέμει ἡμῶν

すなわち、先の議論において、そういったすべてのことについて十分に同意したのだから。そういった無数の対立するものが同時に生じており、われわれの魂はそれらによって満たされているということをね³⁷。

「先の議論」(τοῖς ἄνω λόγοις)は、IV巻439C以下で語られた魂の三部分に関する議論への言及である。X巻のこの時点においても、プラトンは魂の三部分説を保持しており、それを踏まえて、魂における理知的要素と魂の劣った要素との対立について議論を展開しているのである。三部分説との具体的関連は説明されていないが、はっきりしていることは、この魂の劣った要素は、理知的要素と対立するということであり、ミマーシス詩が誘惑するのは、この劣った要素だということである。

われわれはプラトンのムウシケー生涯教育論を見てきたが、魂の三部分説（IV巻）と二部分説（X巻）の併存は、この教育論の観点から適切に説明できるのではないかと思われる。プラトンはVII巻において、三部分説に基づき、名誉支配制的な人間から寡頭制的な人間への変化について語った（553A-D）。すなわち、名誉を愛する野心的な青年が、財産喪失の憂き目に遭うとき、それまでの名誉愛や気概の部分をまっさかさまに突き落とす。代わりに、金銭を愛する欲望的部分を魂の王座にすえ、自分の内なる大王として奉る。そして、その大王の足下のそれぞれの側に、理知的部と気概の部分とを召使いとしてはべらせる。その上で、理知的部に対しては、金儲け以外のことを考えることを許さず、気

概の部分に対しては、富以外のものに尊敬と名誉心をもたないように命じる。さらに、プラトンはIX巻において、僭主（独裁者）の生は最も不幸であり、優秀者支配制の人間（哲学者）の生は最も幸福であることを示す三つの証明を行うが（576B-588A），その一つは魂の機能の三区分にもとづく証明である（580C-583A）。プラトンは、國家が三階層に分けられたように、一人一人の人間の魂も三つに区分されるという観点から、魂に三部分があるのに応じて、快樂にも三つのものがあると語る。一つ一つの部分が、それぞれに固有の快樂を一つずつもつのである。ものを学ぶ部分は、学びと知を快とする。気概の部分は、勝利と名誉を快とする。欲望的部分は、金銭と利得を快とする。プラトンは、知と学びの快樂を「最大の快樂」（583A），あるいは「本物の快樂」（587B）と呼ぶ。彼はIX巻を通じて、魂の三分割説を保持する。彼は、不正が得になると主張することは、いわばこの複雑で多頭の動物とライオン，およびライオンの仲間たちにごちそうを与えて強くする一方，人間を飢えさせ，弱くして，二つの動物たちが好きなところに引っぱっていくようにしてしまい，二つの動物を慣れ親しませて友愛の関係に置くことなく，互いに噛み合い食い合うがままにさせておくようなものである。他方，正義が得になると主張することは、「内なる人間」こそが，最もよく人間全体を支配し，かの多頭動物を思慮深く見守り，穏やかなものは育てて馴らし，野生の荒々しいものは生えないように防ぎ，ライオンの種族を仲間につけ，動物たちを，お互いに対しても，内なる人間に対しても友愛の関係に置いたうえで，

その全部を共通に気づかいながら，そのようにして養い育てるようなものである。

λέγωμεν δὴ τῷ λέγοντι ὡς λυσιτελεῖ τούτῳ ἀδικεῖν τῷ ἀνθρώπῳ, δίκαια δὲ πράττειν οὐ συμφέρει, ὅτι οὐδὲν ἄλλο φησὶν ἢ λυσιτελεῖν αὐτῷ τὸ παντοδαπὸν θηρίον εὔωχοῦντι ποιεῖν ἰσχυρὸν καὶ τὸν λέοντα καὶ τὰ περὶ τὸν λέοντα, τὸν δὲ ἀνθρωπὸν λιμοκτονεῖν καὶ ποιεῖν ἀσθενῆ, ὡστε ἔλκεσθαι ὅπῃ ἀν ἐκείνων ὁπότερον ἄγη, καὶ μηδὲν ἔτερον ἔτερον συνεθίζειν μηδὲ φίλον ποιεῖν, ἀλλ' ἐᾶν αὐτὰ ἐν αὐτοῖς δάκνεσθαι τε καὶ μαχόμενα ἐσθίειν ἄλληλα.

それでは、この人間にとて不正を行なうことが利益になり，正しいことどもを行うことは得にならないかのように語る人に対して，次のように言うことにしよう。彼の言うことは他でもなくこうだ。すなわち，その多種多様の獸に，またライオンとその仲間たちに十分な食べ物を与えて強くし，他方，人間を飢えさせ弱くして，その結果，それらのうちのどちらかが連れて行くところに引っぱられしていくようにしてしまうこと，一方の獸を他方の獸に慣れ親しませて友とすることなく，それらが互いに噛み合い戦い合い，互いに食べ合うようにさせておくこと，それが彼にとって利益になるのだとね³⁸。

この段階でプラトンは，支配者たるべき内なる人間と支配に服すべき動物たち（多頭動物とライオンの種族）というふうに，魂のあり方を二部分の観点から考える方向に移行しつつあるように思われる。プラトンは，一般に認められている美しい事柄と醜い事柄を取りあげ，美しい事柄とは，人間の本性の「獸的な諸部分」（τὰ θηριώδη）を「内なる人間」（τῷ ἀνθρώπῳ），すなわち「神的なもの」

(τῷ θεῖῳ) の下に服従させるような事柄であり、他方、醜い事柄とは、「穏やかな部分」(τὸ ἡμερον) を「野獣的な部分」(τῷ ἀγρίῳ) の下に服従させるような事柄である、と語る (589D)。彼は、「獣的な諸部分」、あるいは「野獣的な部分」を、人間の内にある「最もたちの悪い部分」(τῷ μοχθηροτάτῳ)，あるいは「最も無神的で最も汚れた部分」(τῷ ἀθεωτάτῳ τε καὶ μιαρωτάτῳ，589E)とも言い換える。魂の三分説で言えば、欲望的部分に相当するであろうが、堕落した場合の気概の部分も含まれているように思われる。先にプラトンは、気概の部分に言及して、「ライオンとライオンの仲間ども」と語った (588E)。「ライオンの仲間ども」と言うのは、気概の部分の堕落した形態を考えているからだろうと思われる³⁹。その後、彼は、気概の部分を「ライオン的な部分や蛇的な部分」と呼ぶ (590B)。「蛇的な部分」と呼ぶのも、同じ趣旨からであると思われる。彼の考えによると、これらの部分を不調和に大きく成長させ、緊張させるとき、人間の内に強情や気むずかしさが生まれる。他方、それらの部分を弛めると、贅沢や柔弱が生まれる。これらの部分を「荒れ狂う暴徒のような獣」(τῷ ὄχλῳδει θηρίῳ，590B)，すなわち金銭やさまざまな欲望に飽くことのない複雑多頭の獣（欲望的部分）に屈服させると、へつらいや卑しさが生まれ、気概の部分は「ライオンのかわりに猿となる」(ἀντὶ λέοντος πίθηκον γίγνεσθαι，590B)。猿と化した気概の部分は、今や複雑多頭の獣の仲間である。それらはこぞつて理知的部分に戦いを挑み、これを屈服させようとする。そこでは、魂の三分説は消え、二部分の構図になる。さらに、プラトンは、手を使う仕事がなぜ不名誉であるとされるのかの理由について、それを行う人の魂の内なる「最善の部分の性質」(τὸ τοῦ βελτίστου εἶδος) が、生まれつき弱くて、「自分の内なる獣たち」(τῶν ἐν αὐτῷ θρεμμάτων) を支配

する力がなく、仕えることしかできないようになっているからだと語る (590C)。「自分の内なる獣たち」は、複雑多頭の獣だけではなく、弱体化したライオンとその種族を含んでいると思われる。プラトンは、魂の内なる最善の部分を「神的な支配者」(τὸ θεῖον ἄρχον，590D) と言い換え、この神的な支配者が統治する国制が、やがて子どもたちの内部に確立されるようにすることが、教育の目的であると語る。このような教育の観点からは、不正が気づかれて懲らしめを受けることは、子どもの魂にとって益になる。魂の内なる獣的な部分が眠らされて穏やかになり、穏やかな部分が自由になるので、魂の全体は、本来の最善のあり方に向かい、思慮をもつ節制と正義を獲得するからである (591B)。

穏やかな部分は、Ⅲ巻で語られた将来国家守護者になることが期待される子どもに備わるべき「知を愛する素質」(ἢ φιλόσοφος φύσις，410E) に連結する要素ではないかと思われる。そこでは、知を愛する素質が正しく育まれれば、「穏やかで秩序あるもの」(ἢ μερόν τε καὶ κόσμιον) になると語られた。591Cでプラトンが「知性をもつ人」(ὅ γε νοῦν ἔχων) と言うのは、魂の内においてこの穏やかな部分が、獣的な部分の支配から解放されて、自由に働くことができるようになることに心を向ける人のことであろう。そのような人は、魂をそのようなあり方に作り上げてくれる学問を尊重する。ここでプラトンは、ムウシケー初等教育を終え、数学的諸学科の自由な学習に進む段階にある少年、つまり10歳前後から16歳前後の少年を念頭に置いているだろうと思われる。そのような、いわばムウシケー中等教育の段階にある少年においては、「身体の内なるハルモニアを、魂の内なる協和を目的として常に調和させるのが見られる」(ἀεὶ τὴν ἐν τῷ σώματι ἀρμονίαν τῆς ἐν τῇ ψυχῇ ἔνεκα συμφωνίας ἀρμοττόμενος φανεῖται，591 D) はずである。プラトンによると、そのよ

うな人こそ、「眞の意味でのムウシコス」(*τῇ ἀληθείᾳ μουσικός*)である。眞の意味でのムウシコスを作り上げる学問に関するプラトンの考えについては、III卷のムウシケー・ギュムナスティケー教育論において見たとおりである⁴⁰。すなわち、魂の内に気概的な要素と知を愛する要素との調和を得させることを目的として、ムウシケーとギュムナスティケーとを最も適正に調合した学問が、それである。そして、そのような学問を少年の魂に差し向ける人こそが、「完全に最もムウシケーに優れた者であり、最もよくハルモニアを達成した者」(*τελέως μουσικώτατον καὶ εὐφρμοστότατον*, 412A)であった。さて、IX卷に戻るが、このような魂のあり方を目指すように導かれる若者は、いやしくも眞の意味でのムウシコスになろうとするならば、金銭に関しても名誉に関しても、魂の内なる「秩序と協和」(*σύνταξίν τε καὶ συμφωνίαν*, 591D)をはかろうとする、と語られる。彼は、「おそらく天にある理想的な範型」(*ἐν οὐρανῷ θεως παράδειγμα*, 592B)を見ながら、自分自身の内に国家を建設しようと望む。

プラトンはIII卷において、魂における「気概的な要素」(*τὸ θυμοειδές*)と「知を愛する要素」(*τὸ φιλόσοφον*)との調和が、いかに大事であるかを強調した。その時点では、まだ欲望的部分には言及していなかった。それはIV卷における魂の三部分説を待たなければならなかった。プラトンが、魂の三部分説に先駆けて、気概的な要素と知を愛する要素との調和の問題に留意する理由は、穏やかな部分とされる理知的部が、獣的な部分から解放されて自由に働くことができるため、それら二つの要素の調和がなくてはならない条件だからであろう。プラトンのムウシケー生涯学習プログラムにおいて、中等教育以降は理知的部の教育に重点が移行するのであるが、気概的な要素と知を愛する要素との調和が確保されてはじめて、その土台の上に理知

的部分が伸びやかに育っていくことができる。とはいっても、プラトンは、獣的な部分を支配することがそれほどやさしくないことを知り抜いていた。二つの要素の調和がうまくいき、獣的な部分を眠らせておとなしくさせることができたとしても、獣的な部分はときどき目を覚まし、暴れ出す。若者が哲人統治者教育の道を順調に歩んできたとしても、大人になるにつれて、金銭や名誉や快楽の誘惑が次々と襲いかかる。誘惑の嵐のただ中で、気概的部分は、一方において理知的部の側につくことを望みながら、他方において欲望的部に引きつけられ、両者のはざまで揺れ動く。どうしたらこのやっかいな獣的な部分を抑えることができ、その結果、神的な部分が存分に働くことができるようになるのか。これが残された問題である。この問題に取り組むのがX卷であり、そこでは、魂は三部分ではなく、最善の部と獣的な部という二部分の観点から考察されるのも、そういう事情によるものと思われる。

VII. 第三の議論（605C-607A）

プラトンがミメーシス詩拒絶の理由として展開する第三の議論は、次の言葉で始まる。

οὐ μέντοι πῶ τό γε μέγιστον
κατηγορήκαμεν αὐτῆς. τὸ γὰρ καὶ
τοὺς ἐπιεικεῖς ίκανὴν εἶναι λωβᾶσθαι,
ἐκτὸς πάνυ τινῶν ὀλίγων, πάνδεινόν
που.

とはいっても、われわれはまだミメーシス詩に対する最も重大な告発を完了していない。なぜなら、それがすぐれた人たちをさえも——ほんの少数の何人かを除いて——損なうほどの力をもつということは、非常に恐ろしいことだと思うからだ。

ミメーシス詩拒絶の理由を示す第一の議論は、ミメーシスは真実から三番目に遠いものと関係するというものであった。第二の議論は、ミメーシス詩が魂の劣った部分に影響を与えるというものであった。それらに比べて第三の議論は、ミメーシス詩拒絶の理由としては、「最も重大なもの」（τό γε μέγιστον, 605C）である。それは二つのことを含んでいる。一つは、ミメーシス詩はすぐれた人たちをさえも損なうほどの力をもつということである。もう一つは、それは非常に恐ろしいということである。それでは、ミメーシス詩によって損なわれる可能性がある「すぐれた人たち」（τοὺς ἐπιεικεῖς）とは、どのような人たちのことなのか？ミメーシス詩が、彼らを「損なう」とはどういうことなのか？また、ミメーシス詩が彼らを損なうことは、「非常に恐ろしいこと」だというが、どのような意味においてなのか？

まず、「すぐれた人たち」（τοὺς ἐπιεικεῖς）とはだれを指すのか？結論を先に言えば、ムウシケー高等教育の中にある哲人統治者候補生たちを指すと思われる。ἐπιεικής は、本来、「適當な」、「適合した」、「似合いの」、「ぴったり合う」、「ふさわしい」という意味である。そこから、「もっともらしい」、「公正な」という意味が派生し、さらに、人物について、「才能のある」、「有能な」という意味で用いられ、さらにまた、「道理をわきまえた」、「親切な」、「柔軟な」、「よい」という道徳的な意味をもつようになる⁴¹。この用語は、『国家』第I巻において、「すぐれた人物」（ό ἐπιεικής, 330A）について用いられる。それは「きちんとした充足を知る人間」（κόσμιοι καὶ εὔκολοι, 329D）であり、うそは言わず、供犠をきちんと行い、借りた金はきちんと返す人間である（331B）。III巻においても、この言葉は「すぐれた人物」（ό ἐπιεικής ἀνὴρ, 387D）について用いられ、やはりそれは、「よく生きるために自分自身だけ

で充足する人間」（αὐτὸς αὐτῷ αὐτάρκης πρὸς τὸ εὖ ζῆν, 387E）である。それゆえ、家族や財産を失うなどの不幸にとらえられたとき、嘆くことが最も少なく、平静にそれを耐えることができる人間である（387E）。そこでは、ホメロスやその他の詩人たちの作品における、そういったりっぱな人物が悲しみ嘆く dari は、りっぱな人物にはそぐわないという理由で、削除されるべきであることが語られた（387D-E）。この言葉は、「すぐれたギュムナスティケー」（ἐπιεικής γυμναστική, 404B），とくに戦士階級候補者に適合したそれについて用いられる。それは、推奨される単純なムウシケーに呼応して、質素な食事と生活法を含む単純素朴なものでなければならない（404B-D）。この言葉は、裁判官候補者としての「すぐれた人たち」についても用いられる（οἱ ἐπιεικεῖς, 409A-E）。彼らが「善い知恵のある裁判官」（τὸν δικαστὴν . . . τὸν ἀγαθόν τε καὶ σοφόν, 409D）になるためには、若いときは悪い品性には無経験で、それに染まらないようにしていかなければならない。そこでは、彼らに備わる自然本来の素質が、適正な教育を受けることの重要さが語られた。VI巻においては、この用語は、哲人統治者候補者は、それに適した自然的素質を有すべきことに関連して用いられる。アテナイでは、「哲学に従事している最もすぐれた人たち」（οἱ ἐπιεικέστατοι τῶν ἐν φιλοσοφίᾳ, 489B）でさえ、国の中で尊敬されておらず、役に立たないと見なされているのが現状である。しかし、役に立たないことの責めは、役に立てようとしている大衆にこそ問うべきであり、「すぐれた人たち」（τοὺς ἐπιεικεῖς, 489B）には問うべきではない、と語られる。眞の哲学者は、国家の統治に関しては、「眞の舵取り人」（ἀληθῶς κυβερνήταις, 489C）にもなぞらえられる。495A以下において、子どもに備わったせっかくの哲学的素質も、養育の環境が悪いと、損なわれていくので、注意しなければ

ならないことが語られる。そのような自然的素質をもつ子ども・若者たちは、いわば乙女なる哲学と結婚するのに最もふさわしい人たちである（495B-C）。こういった「哲学と結婚する正当な資格をもつ人たち」（τῶν κατ' ἀξίαν ὁμιλούντων φιλοσοφίᾳ, 496A-B）にとっては、彼らが住む国のあり方が、「自分の素質にぴったりと適合したものであること」（πυχών πολιτείας προστκούσης, 497A）が必要である。「最善の国制」（τὴν ἀρίστην πολιτείαν, 497B-C）のあり方について語るとき、プラトンのソクラテスとその対話相手たちは、いわば国家建設の責任を負う「立法者」（ὁ νομοθέτης, 495D）として語っている。彼らに言わせれば、最善の国制にぴったりと適合する自然的素質をもつ人たちこそは、「すぐれた人たち」（οἱ ἐπιεικεῖς）だということになるであろう（497C-D）。プラトンのムウシケー生涯学習プログラムの観点からは、「すぐれた人たち」とは、数学的諸学科としてのムウシケーを学習する段階にある若者たちであり、さらには哲学の学習における最も困難な部分とされる、「論理的な諸議論に関わる部分」（τὸ περὶ τοὺς λόγους, 498A），すなわち、哲学的問答法（ディアレクティケー）を学習する段階にある成人たちであろう。さらに限定するなら、後者ということになるであろう。今や成人となった彼らは、魂の発育が完成期に入り始めたのだから、体よりも魂のあり方に留意し、「魂の諸訓練を強化しなければならない」（Ἐπιτείνειν τὰ ἔκεινης γυμνάσια, 498B）。VII卷で語られる「魂の向変え」と「真実への上昇」のための教育プログラムで言えば、数学的諸学科の自由な学習を終え、さらに、17, 8歳から20歳までの軍事訓練を終了し、今や20歳になった青年たちの中から、哲学的問答法に適した素質をもつと判定される者たちが選出されることになる。選出された者たちは、20歳から30歳まで数学的諸学科の総合的な学習を行い、哲学的問答法の学習に必要な「総合的な視力をもつ者」

（ό συνοπτικὸς, 537C）になるように努力する。この段階にある者たちにとっては、ミメーシス詩が入り込む余地はない。さらに彼らが30歳になったとき、「諸学問においても、戦争およびその他の法的諸義務においても堅忍不拔の者たち」（καὶ μόνιμοι μὲν ἐν μαθήμασι, μόνιμοι δέ ἐν πολέμῳ καὶ τοῖς ἄλλοις νομίμοις, 537D）にかぎるという基準により、いよいよ30歳から35歳まで哲学的問答法を持続的集中的に学習する者たちが選抜される。その後、彼らは35歳から50歳まで、戦争に関する事柄の統率などの公務に着き、実際上の経験を積まなければならない。それは、あらゆる方向への誘惑に対して、毅然としてそれを退けることができるかどうかについての試験の期間もある。この選ばれた者たちにとっても、ミメーシス詩が入り込む余地はない。かくして50歳に達した人たちの中から、いよいよ哲人統治者にふさわしい人物の選考が行われる。選ばれるのは、実務においても学問においても最優秀者たちである。彼らは、善のイデアの認識と、それにに基づく国家の統治に全力を投入しなければならない。そこにも、ミメーシス詩が入り込む余地はまったくない。特に、哲学的問答法の集中的学習を開始する年齢については注意を要する⁴²。哲学的問答法は、概して道徳や宗教についての議論に関わるものであるから⁴³、「生まれつきよほどすぐれた人」（πάνυ εἴη φύσει ἐπιεικής, 538C）でないかぎり、あまり若いときに議論の味を覚えさせると、それを反論のための反論として濫用し、「法の逸脱に満たされる」（παρανομίας . . . ἐμπίπλανται, 537E）危険がある⁴⁴。その危険は、若者を取り巻く「多くのおべっか使いたち」（κόλαξι πολλοῖς, 538A）によってもたらされる。彼らコラクスたちは、古典期アテナイ時代に、裕福な家庭の食客として寄宿し、主人の求めに応じて、社交や暇つぶしやお世辞などにより、「快楽」（ἡδονᾶς, 538D）を提供した輩である。それは、何が正しいことであり、美しいことであり、善いことである

かについての真実な探求とは正反対であり、若者を「おべっかを使うような生活」(όποιον βίον . . . τὸν κολακεύοντα, 539A), すなわち、楽しいこと・快いことを優先する生活へと誘惑する⁴⁵。コラクスを広い概念で考えるなら、その中には、徳の教師を自称したソフィストたちや、国民議会で民衆に取り入ったデマゴーゴスも含まれるであろう。ソクラテスやプラトンの時代の若者たちも、真理探究から引き離される誘惑を取り囲まれていた。それゆえ、20代の若者では哲学的問答法の学習には早すぎる。10年間、学問と法的諸義務の両面において訓練を積み、合格と判定された者たちだけが、哲学的問答法の学習に与えることができる。したがって、「もっと年輩の者」(ὁ πρεσβύτερος, 539C), すなわち、早くとも30歳くらいでなければならない。しかも、「自然本来の素質の点できちんとした、しっかりしている者たち」(τὰς φύσεις κοσμίους εἶναι καὶ στασίμους, 539D) でなければならない。プラトンは、VIII卷566D-569Cにおいて、僭主とその国家のあり方を吟味した。僭主は、その支配に反対する者たちをすべて排除し、奴隸たちを解放して、自分の護衛兵に加える。解放された奴隸たちや外国人からなる「新参の市民たち」(οἱ νέοι πολῖται, 568A) は、僭主を讃歎し、彼と交流する。これに対して、本来の市民たちの中の「すぐれた人たち」(οἱ ἐπιεικῆς, 568A) は、僭主に迎合せず、彼を憎み彼を避ける。一般に悲劇が知恵に満ちており、特にエウリピデスがすぐれた作家だと思われているのも、理由のないことではない。なぜなら、その作品は、僭主を神であるかのごとく讃美する内容をもつからである。それゆえ、僭主支配制に同調する者たちは、悲劇作家たちを「知者たち」(σοφοί, 568B) として讃美する。しかるに、眞の知者は、悲劇作家ではなく哲学者である。プラトンとその仲間たちは、上記のすぐれた市民たちと共に、優秀者支配制こそが最善の国制であることを信じている。その確信のゆ

えに、「われわれは、悲劇作家たちを、僭主独裁制の讃美者であるゆえに、自分たちの国の中に受け入れないであろう」(αὐτοὺς εἰς τὴν πολιτείαν οὐ παραδεξόμεθα ἀτε τυραννίδος ύμνητάς, 568B) と語る。プラトンは、IX卷588B以下において、すでに同意された魂の三部分説に基づき、I卷で取り上げられた、正義は利益なのか不利益なのかという問題を再び取り上げた。そこでは、「不正を行うことの礼賛者」(ὁ τὸ ἀδικεῖν ἐπαινῶν, 589A) の主張と、「正しいことの礼賛者」(ὁ τὸ δίκαιον ἐπαινῶν, 589B) の主張とが比較検討された。後者の主張は、魂の内において、その「最善の部分」(τὸ βέλτιστον, 589D, 590E), すなわち理知的部分が、劣った部分、すなわち、欲望的・気概の部分を支配する状態が正義であり、利益であるというものである。理知的部分は、「自分の内なる最も神的なもの」(τὸ ἑαυτοῦ θειότατον, 589E), 「神的な支配者」(τὸ θεῖον ἄρχον, 590D), 「神的で思慮深いもの」(θείου καὶ φρονίμου, 590D) とも表現される。欲望的・気概の部分は、「獸的な諸部分」(τὰ θηριώδη, 589D), 「野獸的な部分」(τὰς ἀγριώ, 589D), 「最もたちの悪い部分」(τῷ μοχθηροτάτῳ, 589E), 「最も無神的で最も汚れた部分」(τῷ ἀθεωτάτῳ τε καὶ μαρωτάτῳ, 589E) とも表現される。ソクラテスとその対話者は、正しいことの礼賛者に同意する。そして、ソクラテスは、国制を構想する立法家としての立場から、ムッシュ生涯教育の重要さを改めて提唱する。

δηλοῖ δέ γε, ἦν δ' ἐγώ, καὶ ὁ νόμος
ὅτι τοιοῦτον βούλεται, πᾶσι τοῖς ἐν
τῇ πόλει σύμμαχος ὅν· καὶ ἡ τῶν
παίδων ἀρχή, τὸ μὴ ἔστι ἐλευθέρους
εἶναι, ἔως ἂν ἐν αὐτοῖς ὅσπερ ἐν
πόλει πολιτείαν καταστήσωμεν, καὶ
τὸ βέλτιστον θεραπεύσαντες τῷ
παρ' ἡμῖν τοιούτῳ
ἀντικαταστήσωμεν φύλακα ὅμοιον

*καὶ ἄρχοντα ἐν αὐτῷ, καὶ τότε δὴ
ἐλεύθερον ἀφίεμεν.*

そして明らかに、とぼくは言った。法律もこういったことを意図しており、国家の中にいるすべての人たちにとって戦友である。子どもたちの支配も同じ意図をもつ。すなわち、彼らの中に、まさしく国家の中にと同じように、ある国制を確立するまでは、自由であることを許さない。そして、彼らの内なる最善の部分を、われわれのところにある同様のものによって養育することにより、今度は、子どもの中にわれわれに似た守護者と支配者を確立してやり、その上で、はじめて彼を自由な者として放免してやるのである⁴⁶。

ここでは、魂の内なる正義の確立が、魂の内なる国制の確立であるとして語られている。プラトンの考えでは、これこそが、国家にとって一番大事なことである。「理性をもつ人」(ὁ γέ νοῦν ἔχων, 591C)なら、これに同意するであろう。この表現によってプラトンは、将来の守護者・支配者候補者としてムウシケー初等教育を終えた人を考えているように思われる。そのような人物は、その後のムウシケー中等教育、および高等教育において理性を育み、哲人統治者への道を順調に進んでいくことが期待される。しかしながら、彼を誘惑し逸脱させる諸要素が、社会の中に存在することも事実である。すなわち、そのような要素としては、先ず第一に、ムウシケー生涯教育におけるこの段階にある若者にとって、その魂の内なる国制の建設に役立たない諸学科がある (591C)。それに含まれるのは、エーテンの形成を目的とする初等教育段階にかぎられる音楽・文芸としてのムウシケー学習、大衆に迎合し大衆の通念を代弁するにすぎないソフィスト流の「知恵」⁴⁷、術学的で知性の向上に留意しないピュタゴラス派のハルモニア理論⁴⁸などであろう。理性をもつ若者は、

そういった学問を避け、もっぱら内なる国制の建設に役立つ諸学科を尊重するであろう (591C)。それは、VII卷521C-531C で語られた数学的諸学科の自由な学習と重なるであろう。将来、「本曲」としての哲学的問答法を学ぶための「前奏曲」として、そのような学習は不可欠なのであった。この段階ですぐれた能力を示し、選抜された青年たちにとっては、数学的諸学科の総合的訓練が、そして、その後さらに上位の選抜を通った人たちには、哲学的問答法の持続的集中的学習が、魂の内なる国制の建設に役立つ学問である。理性をもつ人は、そのような学問を尊重するであろう。次に、若者を逸脱させる危険をもつ要素として、身体の状態や養育を「獸的で非理性的な快楽」(τῇ θηριώδει καὶ ἀλόγῳ ἥδονῇ, 591C) に任せ、そこにのみ関心を向けるたぐいのギュムナスティケーがある。III卷403C-412Bにおいて、将来の守護者階級たるべき若者たちの人間形成に関連して、保健としてのギュムナスティケーについて検討が行われた。そこでは、運動選手のプロ化と不養生に対して批判がなされ、単純素朴な食事や生活法が推奨された。ギュムナスティkeeは、一般に、身体の健康だけを目的とすると考えられているが、実は、ムウシケーと協同して、「節制を備えるようになること」(σωφρονήσειν, 591D) が、その真の目的である。それゆえ、理性をもつ若者は、ギュムナスティkeeを行うにあたり、「魂の内なる協和」(τῆς ἐν τῇ ψυχῇ . . . συμφωνίας, 591D), すなわち、「節制」(ソープロシュニー)⁴⁹ を備えることに留意するであろう。そういうふうにして、ムウシケーとギュムナスティkeeをみごとに調合する人こそが、「眞の意味でのムウシコス」(τῇ ἀληθείᾳ μουσικός, 591D) なのである。「ムウシケー好き」(φιλόμουσον, 548E) という程度では、いまだムウシコスの名に値しない。ムウシケー好きという用語は、VII卷548D以下における、名誉支配制に対応する人間

の描写の中で、その特徴の一つとして語られた。そのような人間は、ムウシケー好きとは言えども、「ムーサの女神からはほど遠い人」(ύποαμουσότερον, 548E)であり、眞のムウシケーの学習には向かない人である。彼は、ギュムナスティケや狩猟を愛するが、「ムウシケーと調合されたロゴス」(λόγου... μουσικῆς κεκραμένου, 549B)を欠くため、それが魂の成長に資することはない。

彼について、「このような人間は、若いちは金銭を軽蔑するが、年長になるにつれて、ますます常にそれを歓迎するようになるであろう」(ό τοιοῦτος νέος μὲν ὅν καταφρονοῖ ἄν, δέ πρεσβύτερος γίγνοιτο, μᾶλλον ἀεὶ ἀσπάζοιτο ἄν, 549A-B)とも語られる。公務に就く年齢ともなれば、財貨を獲得し蓄積する機会が増えるであろうから、よほど「徳の保護者」(σωτήρ ἀρετῆς, 549B)であるロゴスを備えていないかぎり、その誘惑に負けてしまうであろう。あげくの果てに、彼は寡頭制の人間にまで堕落するであろう。それは、名誉愛や気概の部分を惜しげもなく捨て去る人間である。一方において、「欲望的かつ金銭を愛する部分をかの魂の王座にすえ、それを内なる大王としてあがめ奉り」(εἰς μὲν τὸν θρόνον ἐκεῖνον τὸ ἐπιθυμητικόν τε καὶ φιλοχρήματον ἔγκαθίζειν καὶ μέγαν βασιλέα ποιεῖν ἐν ἑαυτῷ, 553C), 他方において、その大王の下に理知的部分と気概の部分とを召使いとしてはべらせるような人間である。それほどまでに金銭欲は強い誘惑力をもっているという認識に基づき、プラトンは理性をもつ人に対して、「財貨の所有における秩序と協和」(τὴν ἐν τῇ τῶν χρημάτων κτήσει ούνταξίν τε καὶ συμφωνίαν, 591D)を目指すように奨励する。VIII巻555B以下において、寡頭制から民主制への堕落過程について描写されたように、少数者への富の集中は、やがて大多数を占める貧困層の逆襲により、内戦に至らざるをえない⁵⁰。金銭欲は、「数限りのない諸悪」

(ἀπέραντα κακὰ, C591D) の根源である。それゆえ、哲人統治者への道を進む人は、富の多寡に左右されて、「彼自身の内なるかの諸要素のいずれかを脇に押しやることがないように」(μή τι παρακινή αύτοῦ τῶν ἔκει, 591E) 留意する必要がある。理知的部分、気概的部分、欲望的な部分は、本来それぞれにふさわしいところに位置し、相互に調和を保つ必要があり、その調和は金銭によって乱されてはならない。

理性をもつ人が、30歳で哲学的問答法の持続的集中的学習者に選抜され、さらに35歳で公務に就いて実際上の経験を積む段階になると、今度は名誉が誘惑となる危険が出てくる(592A)。VIII巻545A-550Cにおいて、優秀者支配制がどのようにして名誉支配制に堕落していくかが描写されたおり、名誉志向の危険が指摘された。「最もすぐれた者たち」(τοὺς ἀριστούς, 546D)ではなく、支配者の任務に値しない者たちが、権力の座に着くと、先ず第一に、ムウサたちをないがしろにし始め、「ムウシケー諸学科」(τὰ μουσικῆς)を不當に軽視し、次いで「ギュムナスティケー諸学科」(τὰ γυμναστικῆς)をないがしろにする。ギュムナスティケー諸学科をないがしろにするとは、魂における正義と調和の達成を目的とするものとしてのギュムナスティケーをないがしろにし、身体の訓練の面を過当に重視する態度であろう。その結果、こういう支配者たちによる教育の下では、若者たちは、優秀者支配制の時代に比べて、「より無ムウサ的な者たち」(ἀμουσότεροι), すなわち、ムウサたちの学芸を無視する無教養な者たちになるであろう(546D)。こういう者たちが支配者として統治するのが、名誉支配制の国家である。この国制の下では、「諸言論と愛知を伴う眞のムウサ」(τῆς ἀληθινῆς Μούσης τῆς μετὰ λόγων τε καὶ φιλοσοφίας, 548B-C)よりもギュムナスティケーが、魂より身体が、理性より気概が尊重されるゆえに、「勝利と名誉を愛し

求ること」(φιλονικίαι καὶ φιλοτιμίαι, 548C) が、国家の守護者たるべき者たちの努力目標となる。この国制に対応する人間は、戦争好きであり、権力欲が強く、戦争の実績に基づいて地位や名誉を欲しがり (549A)，金銭や公務のことがらに忙しくする人間を男らしい人間だとして尊敬する (550A)。こういう「野心的で名誉を志向する男」(ύψηλόφρων τε καὶ φιλότιμος ἀνήρ, 550B) が支配者になるとき、必ずや常に戦争と敵意が生まれ (547 A)，国家は解体の危機にさらされる。

さて、IX卷の末尾に戻るが、理性をもつ人は、「現存の状態を解体するかもしれないもろもろの名誉」(τιμάς. . . ἄς δ' ἂν λύσειν τὴν ὑπάρχουσαν ἔξιν, 592A) を私的にも公的にも避けるだろう、と語られるとき、上述の名誉支配制の人間に照らして理解できるであろう。名誉は、地位と金銭を伴うものであるだけに、哲人統治者候補の道をかなり登りつめた35歳以上の人にとっても、大きな誘惑である。だからこそ、彼がこれまで建設してきた、魂の内なる国制を解体させる危険をもつ名誉であるなら、彼は毅然としてそれを避けなければならない。しかしながら、それは政治からの逃避を意味しない。現実の祖国においてはとにかくとしても、「彼自身の国家」(τῇ ἑαυτοῦ πόλει, 592A)，すなわち、VI卷497Aにおいて語られた、彼の素質に「ぴったり適合した国家」(πολιτείας προσηκούσης)においてならば、彼は積極的に国政に参加するであろう。それは、ソクラテスとその対話者たちが、言論によって建設してきた理想的な国家に他ならない (592A-B)。

かくして、理性をもつ人は、哲学的問答法から逸脱する危険のある諸学科、金銭、名誉の誘惑を退け、最終的に最優秀者であることが判明するなら、50歳以後は善のイデアの認識に専念し、以後は哲学と国家統治とを交互に繰り返すことになる。しかし、それほどまでに優秀な者であっても、まだ闇わなければ

ならない最後の難敵がある。それが、ミメーシス詩である。プラトンがX卷冒頭で、ミメーシス詩はそれを聞く人たちの心を損なう危険があると語ったとき、一番念頭にあるのは、哲人統治者のためのムウシケー生涯教育過程を最後までやりとげた最優秀者たちのことであろう。プラトンのソクラテスはその対話者と共に、ムウシケー生涯教育について論じながら、順を追って理想国家を言論によって建設してきた。今や「われわれが建設してきた」(φάκιζομεν, 595A) 国家は、仕上げの段階に入った。この段階で大事なことは、いかにして哲人統治者候補を理想国家にふさわしく仕上げるかということである。プラトンのソクラテスが、「子どもの頃からぼくをしっかり捉えているホメロスについてのある種の愛と畏れ」(φιλία γέ τις με καὶ αἰδώς ἐκ παιδὸς ἔχουσα περὶ Ὁμήρου, 595B) を告白するように、ソクラテスやプラトンのような哲学に専心する人物にとっても、ホメロス、すなわち、ホメロスが代表するミメーシス詩は、哲学の営みに対するなどりがたい脅威であった。プラトンは、ミメーシス詩を拒絶する理由として、ミメーシスは真実から三番目に遠いものと関係することを論証し、さらに、ミメーシス詩が魂の劣った部分に影響を与えることを論証した上で、次のように結論を述べる。

καὶ οὕτως ἥδη ἂν ἐν δίκῃ οὐ παραδεχοίμεθα εἰς μέλλουσαν εὔνομεῖσθαι πόλιν, ὅτι τοῦτο ἐγείρει τῆς ψυχῆς καὶ τρέφει καὶ ἴσχυρὸν ποιῶν ἀπόλλυσι τὸ λογιστικόν, ὃσπερ ἐν πόλει ὅταν τις μοχθηροὺς ἐγκρατεῖς ποιῶν παραδιδῷ τὴν πόλιν, τοὺς δὲ χαριεστέρους φθείρῃ· ταύτὸν καὶ τὸν μιμητικὸν ποιητὴν φήσομεν κακὴν πολιτείαν ιδίᾳ ἐκάστου τῇ ψυχῇ ἐμποιεῖν, τῷ ἀνοήτῳ αὐτῆς χαριζόμενον καὶ οὕτε τὰ μείζω οὕτε τὰ ἐλάττω

διαγιγνώσκοντι, ἀλλὰ τὰ αύτὰ τοτὲ μὲν μεγάλα ἡγουμένω, τοτὲ δὲ σμικρά, εἰδωλα εἰδωλοποιοῦντα, τοῦ δὲ ἀληθοῦς πόρρω πάνυ ἀφεστῶτα.

かくして今やわれわれは、秩序正しく治められようとしている一つの国家の中に、ミメーシス詩人を受け入れるわけにいかないが、それは公正なことなのだ。なぜなら、彼は魂の劣った要素を呼び起こし、養い、強くすることによって、理知的要素を滅ぼしていくからだ。ちょうどそれは、一つの国においてと同じで、だれかが、たちの悪い者たちに権力を与えることによって国を引き渡し、他方、より洗練された人たちを滅ぼすとき、いつでもそうなるのだ。それとまさに同じように、ミメーシス詩人もまた、一人一人の魂の中に私的に悪い国制を作っていくのだと、われわれは言うべきであろう。魂の非思惟的要素にとつて快いことを言い続けることによってね。その要素は、大きいものども小さいものどもも識別せず、同じものどもをあるときには大きいものどもと考え、またあるときには小さなものどもと考える。そして彼は、影像どもを作り続けるのだ。しかし、それらは真実なるものからまったく遠く離れたところにあるものどものだ⁵¹。

ここでプラトンが語るのは、魂の内なる国制のあり方についてである。しかも、哲人統治者の最終候補者たちのそれについてである。幾多の厳しい選抜を勝ち抜いてきた彼らの魂においてさえも、ミメーシス詩は、今なお残存する快樂を欲する非思惟的な要素を助長することによって、理知的要素を滅ぼしていく危険があることを、プラトンは知っていた。それゆえ、哲人統治者最終候補生は、この危険を避け、魂の理知的要素の保全とさらなる育成に留意しなければならない。かくして、605Cにおいてプラトンが、ミメーシス詩

は「すぐれた人たちさえをも損なうほどの力をもつ」(τὸ γὰρ καὶ τοὺς ἐπιεικεῖς ἱκανὴν εἶναι λωβᾶσθαι) という、ミメーシス詩に対する最大の告発を行うとき、「すぐれた人たち」とは哲人統治者最終候補生たちであり、「損なう」とは、その魂を哲人統治者に適さない状態にし、彼らがこれまで受けてきたムウシケー生涯教育をだいなしにしてしまうことである。ミメーシスは、すぐれた人たちの魂に對してさえそれほどすさまじい影響力をもつ。それは、他人事ではなく、ソクラテスとその仲間たちにも、プラトンとその仲間たちにも共通する認識であった。プラトンのソクラテスは、グラウコンに次のように言う。

ἀκούων σκόπει. οἱ γάρ που βέλτιστοι ἡμῶν ἀκροώμενοι 'Ομήρους ἦ ἄλλους τινὸς τῶν τραγῳδοποιῶν μιμουμένουτινὰ τινὰ τῶν ἡρώων ἐν πένθει ὅντα καὶ μακρὰν ρῆσιν ἀποτείνοντα ἐν τοῖς ὁδυρμοῖς ἦ καὶ ἥδοντάς τε καὶ κοπτομένους, οἵσθ' ὅτι χαίρομέν τε καὶ ἐνδόντες ἡμᾶς αὔτοὺς ἐπόμεθα συμπάσχοντες καὶ σπουδάζοντες ἐπαινοῦμεν ὡς ἀγαθὸν ποιητήν, ὃς ἂν ἡμᾶς ὅτι μάλιστα οὕτω διαθῆ.

さあよく聞いて考えてくれたまえ。というのは、思うに、英雄たちのだれかが悲痛のなかにあり、悲しみ嘆きをもって長いせりふを語りけたり、あるいはまた作中の人々がそれを歌い胸を打ち続ける様子を、ホメロスか、または悲劇作家の中の他のだれかがミメーシスしている（真似し演じている）のを、われわれの中の最もすぐれた者たちが聞いているとき、君も知っているように、われわれは喜んでおり、われわれ自身をそのミメーシスに明け渡し、それに共感しつつ追隨していく。そして、だれであれ、われわれを最も強くそのような気分にさせてくれる作家を、すぐれ

た作家だとして真剣に讃美しているのだ⁵²。

ここでプラトンは、単なる想定を述べているのではない。「われわれの中の最もすぐれた者たち」の魂の中に、現実に生じる体験を語っているのである。ここでミメーシスされているのは、英雄たちのだれかである。つまり、すぐれた者たちにとっても親近性があり、大きな関心を寄せるはずの存在である。英雄は、一般に、アレティーを示す人物であることが期待されているが、ミメーシス詩においては、しばしば英雄たちが人生の苦しみに直面して、嘆き悲しむ場面が描写される。しかし、プラトンの考えでは、英雄はそうであってはならず、苦しみに雄々しく立ち向かう英雄像を保持しなければならない。たとえば、息子を失うなど、最も大事なものを失うような不幸に遭遇したとき、他のだれよりも平静にそれを耐え忍ぶのが、英雄である⁵³。すぐれた者たちは、演劇祭などにおける公衆の面前では、悲嘆にくれる英雄の姿に心を動かされないふりをすることができるかもしれない。しかし、魂の内実はといえば、「われわれは喜んでいる」(χαίρομεν)のである。『国家』第III卷において、子どもたちのムウシケー・ギュムナスティケー教育について、快苦によるエーストスの形成が大事であることが語られた。それについては、本論文のVIIにおいても詳しく論じたとおりである。そこで語られたプラトンの基本的な考えは、子どもたちは、美しいものや正しいものを快とし、醜いものや不正なものを苦とする教育を受けることによって、彼らの魂のエーストスは順調に形成されていくということであった。そのエーストス教育を担うのが、ムウシケー生涯教育における初等教育としてのムウシケーであり、正しいムウシケーのあり方に従うものとしてのギュムナスティケーであった。そこにおいて、プラトンが、音楽・文芸としてのムウシケーにおける詩の内容、レクシス（語り方）、ハルモニア、

リュトモスのエーストスについて詳しく述じたのは、ひとえに、快苦によるエーストス教育の重要性に鑑みてであった。彼は、このエーストス教育が初等教育の段階で完成されるとは考えていない。彼のムウシケー生涯教育のプログラムにおいては、初等教育から中等教育へ、そして、中等教育から高等教育へと進むにつれて、理性の教育に重点が移行していく。しかしながら、快苦と美・醜との一致、あるいは快苦と正・不正との一致の教育は、理性の教育と連動して継続されいかなければならない。おそらく、その営みは、生涯を通じて行われなければならないであろう。606Aにおいて、「われわれの生来最善の要素は、理性によつても習慣によつてもいまだ十分に教育されていないので、この哀歌にふさわしい要素に対する監視をゆるめていく」(τὸ δὲ φύσει βέλτιστον ήμῶν, ἄτε οὐχ ἱκανῶς πεπαιδευμένον λόγω οὐδὲ ἔθει, ἀνίησιν τὴν φυλακὴν τοῦ θρηνώδους τούτου, 606A-B) と語られるとき、その「われわれ」の中には、子どもだけではなく大人も、そして最もすぐれた人たちも、含まれていると見るべきであろう。『法律』第II卷における、「最も楽しい生と最も善である生とは同一である」と神々によって語られている」(τὸν αὐτὸν ἥδιστόν τε καὶ ἄριστον ὑπὸ θεῶν βίον λέγεσθαι) という、ディテュラムボスによる生涯教育論の構想は、そのような認識に基づいていると言えよう。なぜなら、ソクラテスやプラトンのような人にとっても、したがって、哲人統治者最終候補生たちにとっても、快苦の取り違えはいつでも起こりうる危険があるからである。その危険を引き起こす最大の誘惑が、ミメーシス詩である。ミメーシス詩におけるミメーシスは、それを受ける者にとっては、その人の魂の奥底にまで浸透していくことができるほどの力をもつ。最もすぐれた者たちできえ、英雄が悲嘆にくれるありさまなどは、忌むべきことであることを知っているつもりではいても、実際にミメーシスに長けた叙事

詩吟唱家や悲劇俳優による、ミメーシスの技術を駆使したミメーシスに接するとき、彼らの魂はその奥底で英雄のそのようなありさまを喜び、歓迎する。人間の魂には、終生、悲しみを喜びとする要素が住み続けている、としか言いようがない。しかし、理性をもってそのような倒錯した喜びを抑制することが、哲学者には求められる。「われわれ自身をそのミメーシスに明け渡し、それに共感しつつ追随していく」(ἐνδόντες ήμας αὐτοὺς ἐπόμεθα συμπάσχοντες) と語られるが、それはミメーシスがもつ「同化力」(όμοιοῦσθαι, assimilation)への言及である。ミメーシスは、それを行う作家や俳優に対しても、それを受け入れる聴衆に対しても、強力な同化作用を及ぼすことについては、『国家』第Ⅲ巻と本論文のⅧにおいて論じたとおりである。プラトンが、英雄の悲嘆を真似るミメーシスの影響力について、「他者に属することどもから喜びを享受することは、必ずやわが身に属することどもにも伝染する」(ἀπολαύειν ἀνάγκη ἀπὸ τῶν ἀλλοτρίων εἰς τὰ οἰκεῖα, 606B) と言うのは、そういうことである。すぐれた者たちさえ、ミメーシスによって同化され、ついにはミメーシス詩人をすぐれた作家だと錯覚し、これを賞賛するところまで行ってしまう。先に、ミメーシスは、一つの遊びであり、真剣な営みではないということが語られた(602B)。それなのに、ミメーシスは、すぐれた者たちをさえ真剣にさせる魅惑力をもっている。ミメーシスの恐ろしさは、叙事詩や悲劇だけにかぎらない。同じことは喜劇に関しても当てはまる。

ἄρ' οὖν οὐχ ὁ αὐτὸς λόγος καὶ περὶ τοῦ γελοίου; ὅτι, ἂν αὐτὸς αἰσχύνοιο γελωτοποιῶν, ἐν μιμήσει δὲ κωμῳδικῇ ἢ καὶ ἰδίᾳ ἀκούων σφόδρα χαρῆς καὶ μὴ μισῆς ὡς πονηρά, ταύτὸν ποιεῖς ὅπερ ἐν τοῖς ἑλέοις; Ὁ γάρ τῷ λόγῳ αὖ κατεῖχες ἐν σαυτῷ βουλόμενον γελωτοποιεῖν,

φοβούμενος δόξαν βωμολοχίας, τότ' αὖ ἀνιεῖς, καὶ ἐκεῖ νεανικὸν ποιήσας ἔλαθες πολλάκις ἐν τοῖς οἰκείοις ἐξενεχθεὶς ὥστε κωμῳδοποιὸς γενέσθαι.

したがって、同じ議論は、笑いを呼ぶことについても当てはまるのではないか？ すなわち、君自身は笑いを呼ぶ者であることを恥じるかもしれないのにもかかわらず、喜劇のミメーシスか、または私的な機会のミメーシスにおいて、そういったことを大いに喜び、悪いことどもあるとして憎むことをしないならば、哀れなことどもにおけるのとまさに同じことをしているのだ。なぜなら、今度もまた、道化者という悪評を恐れるゆえに、理性によって君自身の内に拘置していた笑いを呼ばうと欲する要素を、解放することになるからだ。そして、そういう場でその要素を無鉄砲にしてやることによって、君は知らずに、しばしばそこから連れ去られ、ついには、わが身に属すことどもにおける喜劇役者になってしまふのだ⁵⁴。

プラトンは喜劇のミメーシスに対しても警鐘を鳴らす。ここで語られる「笑いを呼ぶこと」(τοῦ γελοίου) とは、下品な笑いのことであろう⁵⁵。哲人統治者最終候補者たちであっても、気を緩めて喜劇を観ているうちに、われ知らず(ἔλαθες) 演技者の下品な笑いを自らの魂の中に取り込み、自分自身も下品な笑いを呼ぶことを喜ぶ人間に同化していく危険がある、とプラトンは考える。危険なのは、喜劇が開催される演劇祭におけるミメーシスだけではない。「私的な機会に」(ἰδίᾳ), たとえば、私的なシュムポションなどにおける交友や会話を通しても⁵⁶、ミメーシスの影響が魂の中に浸透する危険がある。笑いや悲しみだけではない。「性的諸快楽や怒り」(ἀφροδισίων δὴ καὶ θυμοῦ) のミメーシスに対

しても、警戒を緩めてはならない。ひいては、魂におけるソープロシュネ（節制）が要請されるすべての欲望と快苦についても同じことが言える。同化は、理性によって抑制されなければならない。そして、魂の理知的部分がいやましに増強されていかなければならぬ。しかるに、ミメーシス詩におけるミメーシスは、それらの情動にいわば水をやって育て、それらが魂における支配者になるようにさせる。その結果、せっかく築き上げてきた魂の内なる国制は倒壊し、消滅してしまう。つまり、われわれは、「よりすぐれ、かつより幸福な者たち」(βελτίους τε καὶ εὐδαιμονέστεροι) になるかわりに、「より悪い、かつよりみじめな者たち」(χειρόνων καὶ ἀθλιωτέρων) になる⁵⁷。今や、いかにミメーシス詩批判が重大なことがらであるかが、明らかとなつた。この世において、そして未来永劫において、よりすぐれた人間になるのか、それとも、より悪い人間になるのか、あるいはまた、より幸福な人間になるのか、それとも、よりみじめな人間になるのかという二者択一である。*ἀθλιώτατος*という用語は、IX卷において、僭主的人間の生き方に対して下される評価を表すのに使われた。そこでは、僭主的な人間は、最も悪い人間であり、それゆえ、「最もみじめな人間」(*ἀθλιώτατος*, 576B-C) であることが語られた。僭主に対応する国家と優秀者に対応する国家とについて言えば、「一方において、僭主の支配下にある国家よりみじめな国家はなく、他方において、優秀者の支配下にある国家より幸福な国家はない」(τυραννουμένης μὲν οὐκ ἔστιν ἀθλιωτέρα, βασιλευομένης δὲ οὐκ εὐδαιμονεστέρα, 576E) ということも語られた⁵⁸。哲人統治者最終候補者たちにとって、僭主的なみじめな生き方に墮ちるのか、それとも優秀的な幸福な生き方に昇るのか、あるいは、永遠の観点から言えば、「幸福者たちの島々」(μακάρων νῆσοι)⁵⁹ に移り住むことができるのか、できないのかは、ミメーシ

ス詩に屈服するのか、それとも哲学的問答法の道行きを貫くのかにかかっている。

すぐれた国制の建設を熱望するがゆえの、ミメーシス詩に対するプラトンの告発は、以上の通りである。われわれは、本論文Iにおいて、古典期アテナイでは、音楽・文芸としてのムウシケーが、ポリス社会の教育者としていかにゆるぎない位置を占めていたかを見た。そして、その教育が行われる最大の場と機会が、ミメーシス詩を中心とする諸演劇祭であり、それらは実際に数多くの機会に開催された。ソクラテスもプラトンも、社会の現実をよく知っていた。アテナイのまちは「ホメロスの讃美者たち」(‘Ομήρου ἐπαινέταις) に不足することではなく、アゴラあたりに行くなら、いつでもそのような輩に出会うことができたであろう。哲人統治者最終候補者たちでさえ、彼らに同調してしまう危険があることについては、先に見たとおりである⁶⁰。ホメロス讃美者たちは、次のように唱和する。

τὴν Ἑλλάδα πεπαίδευκεν οὗτος ὁ ποιητὴς καὶ πρὸς διοίκησίν τε καὶ παιδείαν τῶν ἀνθρωπίνων πραγμάτων ἄξιος ἀναλαβόντι μανθάνειν τε καὶ κατὰ τοῦτον τὸν ποιητὴν πάντα τὸν αὔτοῦ βίον κατασκευασάμενον ζῆν

これまでギリシャを教育してきたのは、まさにこの詩人であり、人間にに関する諸事の運営および教養のためには、人は彼の作品を取り上げて学び続け、この詩人の作品に従って自らの生活全体を律して生きていかなければならない⁶¹。

当時の社会では、むしろこのような考えが大勢を占めていた。この言葉を語る「ホメロス讃美者たち」(‘Ομήρου ἐπαινέταις) は、605Dにおいて見た「われわれは讃美している」

(ἐπαινοῦμεν) を想起させる。しかし、それにかぎらずとも、他にもホメロスを讃美する者が大勢いたであろうことは、想像に難くない。『イオン』では、叙事詩吟唱家のイオンが、ホメロスを讃美する人として語られている⁶²。おそらくプラトンがここで念頭に置いているのは、特に、ホメロスの作品を使用することを職業とする人たちだろうと思われる。その中には、ソフィストたちも含まれる⁶³。「運営と教育」(διοίκησίν τε καὶ παιδείαν) という組み合わせも、ソフィストを連想させる。600Dにおいて、ソフィストたちは、同時代の人々の心に、「もし自分たちが彼らの教育の世話をしてあげなければ、彼らは自分の家をも国家をも運営することはできないであろう」(οὕτε οἰκίαν οῦτε πόλιν τὴν αὐτῶν διοικεῖν οἶοί τ' ἔσονται, ἐάν μὴ σφεῖς αὐτῶν ἐπιστατήσωσιν τῆς παιδείας) という考えを植え込むのに成功している、と語られた。当時、ソフィストたちが、教育において詩を用いることは適切なことであると考えられており⁶⁴、しかも、プロタゴラスの主張によると、ホメロスを含む古代の詩人たちの何人かは、知識の教師たちという意味において、実際に「ソフィストたち」であった⁶⁵。「この詩人の作品に従って自らの生活全体を律して生きていかなければならない」(κατὰ τοῦτον τὸν ποιητὴν πάντα τὸν αὐτοῦ βίον κατασκευασάμενον ζῆν) という表現も、ホメロスの作品が、あたかも模範とされ遵守されるべき法律であるかのような印象を与える⁶⁶。ミメーシス詩に対する批判は、ソフィストたちに対する批判を含むと見ることができるであろう。

プラトンのソクラテスは、こういった考え方をもつホメロス讃美者たちを真っ向から否定するようなことはしない。

φιλεῖν μὲν χρὴ καὶ ἀσπάζεσθαι ὡς
ὄντας βελτίστους εἰς ὅσον δύνανται,
καὶ συγχωρεῖν "Ομηρον

ποιητικώτατον εἶναι καὶ πρῶτον
τῶν τραγῳδοποιῶν, εἰδέναι δὲ ὅτι
ὅσον μόνον ὕμνους θεοῖς καὶ ἐγκώμια
τοῖς ἀγαθοῖς ποιήσεως παραδεκτέον
εἰς πόλιν· εἰ δὲ τὴν ἡδυσμένην
Μοῦσαν παραδέξῃ ἐν μέλεσιν ἥ
ἔπεσιν, ἡδονή σοι καὶ λύπη ἐν τῇ
πόλει βασιλεύσετον ἀντὶ νόμου τε
καὶ τοῦ κοινῆ ἀεὶ δόξαντος εἶναι
βελτίστου λόγου.

君は、一方において、できる範囲内で最善な人たちであるとして、彼らに友愛をもち挨拶をし、そして、ホメロスが傑出した詩人であり、悲劇作家たちの第一人者であることを認めてあげなければならない。他方、国家の中に受け入れるべきものは、神々への讃美歌とすぐれた人々への讃歌にかぎる、ということを知っているなければならない。もし君が、抒情詩または叙事詩でもって楽しそうに装ったムウサを受け入れるなら、快苦が、君の国家において王として統治するであろう。法、ならびに最善だと公に常に認められる理性の代わりにね⁶⁷。

プラトンは、ホメロス讃美者たちが、彼らなりに「最善である」(βελτίστους, 607A) ことを目指していることは、いちおう認める。しかしながら、「最善である」ことの意味が、プラトンと彼らとの間では違うことは、今や明らかである。プラトンにとってそれは、哲人統治者たちのためだけに取っておかれるべき言葉である。「ホメロスが傑出した詩人であり、悲劇作家たちの第一人者である」("Ομηρον ποιητικώτατον εἶναι καὶ πρῶτον τῶν τραγῳδοποιῶν, 607A) とする彼らの主張をも、プラトンはいちおう認める。しかしながら、彼にとっては、すぐれた国家の建設に鑑みて、眞の意味で傑出した詩人とは何なのか、また、眞の意味で悲劇作家の第一人者とは何かということが、そもそも問題であった。

プラトンの確信するところでは、哲人統治者たちだけが、眞の意味で傑出した詩人であり、眞の意味で悲劇作家の第一人者である。詩の作品について言えば、ホメロスが提供する作品は、形成途上の個人の魂と国家を滅ぼしてしまうたぐいのミメーシス詩である。それに対して、哲人統治者が提供する作品は、個人の魂と國家の建設を完成に導くのにふさわしい「神々への讃美歌とすぐれた人々への讃歌」(Ὕμνους θεοῖς καὶ ἐγκώμια τοῖς ἀγαθοῖς, 607A)である。「抒情詩または叙事詩でもって楽しそうに装ったムウサ」(τὴν ἕδυσμένην Μοῦσαν. . . ἐν μέλεσιν ή ἔπεσι)⁶⁸ を眞のムウサと思い誤り、魂の国制の中に受け入れるようなことがあってはならない。すでに601A-Bにおいて、ミメーシス詩が、メトロンやリュトモスやハルモニアのような音楽的色彩をもって語られると、たいそう美しくりっぱに語られているように思える、ということが語られた。しかし、実際は、思い違いであり、それらの色彩がはぎ取られて、詩の言葉がそれ自体として観察されるなら、「若ざかりではあるが、実は美しくない顔のようである」(ἔοικεν τοῖς τῶν ὡραίων προσώποις, καλῶν δὲ μή, 601B)。もしそのような俗悪なムウサを受け入れるようなことになれば、魂の王国において、快苦が僭主独裁者として統治するであろう。しかしながら、眞の統治者にふさわしいのは、先に604Aで語られたように、ノモスとロゴスである。アテナイ人にとって、国家におけるノモスの究極の制定者は、神であった⁶⁹。人間は神への奉仕者にすぎない。神から与えられた最善の贈り物としての理性を用いて、人間は、その魂の内なる国制を秩序づけ統治しなければならない。その役割を担うのが哲学である。IX卷499Dで語られたように、哲学こそは眞のムウサであり、「このムウサが一国の統治者となる」(αὕτη ή Μοῦσα πόλεως ἐγκρατής γένηται)とき、最善の国制の実現が近づくのである。

ミメーシス詩が個人と社会の規範であることが当然とされていた時代であるから、プラトンのミメーシス詩批判は、おおかた、いかにも社会の常識から外れた途方もない主張として受け取られたことであろう。しかし、プラトンが『国家』を通じて構築してきた、最善の国制の仕上げのためには、ミメーシス詩の拒絶は必至であった。以上をもって、プラトンのミメーシス詩拒絶論、すなわちミメーシス詩に対する哲学の側からの弁明が完了する。かくして、X卷におけるミメーシス詩拒絶の処置は、III卷398A-Bにおけるそれと一致符合することも、明らかとなった(607B)。

※本稿は、北星学園大学文学部北星論集第43卷第2号（通巻第45号）（2006年3月）に所収の同じ表題の論文の（その1）を受ける。

註

- 1 M. F. Burnyeat, "Culture and Society in Plato's Republic": 296-300.
- 2 373B-C
- 3 598A-B
- 4 598B-C
- 5 234B
- 6 Cf. ブルクハルト『ギリシャ文化史』第III巻: 49-55; 55, n. 11
- 7 T. B. L. Webster, *Everyday Life in CLASSICAL ATHENS* (London: B. T. BATS-FORD LTD, 1969): 149-150.
- 8 Webster, 169
- 9 595B
- 10 598D
- 11 M. F. Burnyeat, "Culture and Society in Plato's Republic": 300-301.
- 12 この語は、非常にしばしばソフィストについて用いられ、常に皮肉の意味が込められている。たとえば、『エウテュデモス』271C, 287C;『プロタゴラス』315E. Cf. S. Halliwell, *Plato: Republic 10* (Aris & Phillips, 1993): 120-121
- 13 598C-D
- 14 ALEXANDER NEHAMAS, "PLATO ON

- IMITATION AND POETRY IN REPUBLIC 10,” : 58は、ミーメシスという用語は、古来、詩、語り、踊りに用いられ、「～のよううに演じること」を意味した、と指摘する。
- 15 595B Cf. Halliwell, *Plato* : 120.
- 16 598D
- 17 595C
- 18 598D-E
- 19 599A
- 20 606Eでは、ホロメスこそまさに「ギリシャの教師」であり、人生全般と教育の手本であるとするホメロス賛美者たちへの言及がある。 Cf. H. I. Marrou, *A HISTORY OF EDUCATION IN ANTIQUITY*, trans. George Lamb (SHEED AND WARD, 1956) : 9-10 ; Fr. A. G. Beck, *Greek Education* (London : Methuen, 1964) : 120-121. Marrouは、イタリア人にとってダンテが、イギリス人にとってシェークスピアが古典中の古典であったけれども、ギリシャの教育におけるホメロスの重要性は、それらを絶対的に凌駕するものであつた、と指摘する。
- 21 M. F. Burnyeat, “Culture and Society in Plato’s Republic”: 307
- 22 601A-B
- 23 475D-E
- 24 601B
- 25 602A
- 26 602C-603A
- 27 603B
- 28 Halliwell, *Plato* : 135.
- 29 603C-D
- 30 Halliwell *Plato* : 137.
- 31 James Adam, *The Republic of Plato* II : 411は、τὸ ἀγανακτητικόνを魂の三部分説における「気概の部分」(τὸ θυμοειδές)が墜落した一形態であると考えるが、プラトンがX巻のこの箇所を魂の三部分説の観点から考えているかどうかは、明らかではない。ここでプラトンが明言していることは、人間の魂には悲嘆にとらわれやすい傾向があるということである。
- 32 P. Murray, ed., *Plato On Poetry* (Cambridge University Press, 1996) : 221-2.
- 33 F. M. Cornford, “Psychology and Social Structure in the Republic of Plato”, *Classical Quarterly* 6 (1912) : 246-265.
- 34 N. R. Murphy, *THE INTERPRETATION OF PLATO’S REPUBLIC* (OXFORD UNIVERSITY PRESS, 1951) : 239-243.
- 35 Cf, ALEXANDER NEHAMAS, “PLATO ON IMITATION AND POETRY IN REPUBLIC 10” : 64-67.
- 36 M. F. Burnyeat, “Culture and Society in Plato’s Republic”, 223-228.
- 37 P. Murray, ed., *Plato On Poetry* : 215-6 ; 221-2.
- 38 603D
- 39 588E-589B
- 40 Cf. James Adam, *The Republic of Plato Vol. II* : 365-366.
- 41 特に, 411E-412A
- 42 Cf. LSJ
- 43 537D-539E
- 44 Adam II, 152.
- 45 Cf. 539A παράνομος
- 46 Allan Bloom : 466. n. 30は、おべつか使いは、おそらく、善いことに反して、楽しいことに訴える輩のことであると理解する。 Cf. 『ゴルギアス』 463B
- 47 590E-591A
- 48 VI巻493A
- 49 数学的諸学科としてのムウシケーの学習に含まれる天文学の学習に従事している若者たちにとって、「耳を知性よりも先に立てている」ピュタゴラス派のハルモニア理論は無益である、というプラトンの見解については、VII巻 530D-531Cを参照。
- 50 IV巻442Cでは、「節制ある人」(σώφρονα)とは、魂の三部分相互の間に「友愛と協和」(τῇ φιλίᾳ καὶ συμφωνίᾳ)をもつ人であると語られる。また、443Eでは、その魂の中に正義をもつ人は、「節制がありハルモニアを保つ人」(σώφρονα καὶ ἡρμοσμένον)と語られる。
- 51 605B-C
- 52 605C-D
- 53 603E, III巻387D. Cf. Halliwell, *Plato* : 144.
- 54 606C
- 55 Cf. Halliwell, *Plato* : 150.
- 56 600C-Dでは、ιδίᾳはソフィストたちが同時代の人たちと「私的に交友すること」(ιδίᾳ συγγιγνόμενοι), すなわち私的な教育を教授することについて用いられている。 Cf. P. Murray, ed., *Plato On Poetry* : 228.
- 57 606D

プラトン『国家』篇X卷におけるミメーシス詩拒絶の理由（その2）

- 58 僕主的人間がみじめであることについては、
576B-580Cを参照。
- 59 VII卷519C；540B
- 60 605D
- 61 606E
- 62 536D, 541E
- 63 Halliwell, *Plato* : 152
- 64 『プロタゴラス』338E以下。
- 65 『プロタゴラス』316D
- 66 『プロタゴラス』326Cでは、法律はまさにそ
のようなものとして語られている。Cf. Hall-
iwell, *Plato* : 152.
- 67 607A
- 68 ήδυσμένην は、「味付けられた」という意味合
いをもつ。ここではその味とは、メトロン、
リュトモス、ハルモニアなどの音楽的要素で
ある。Cf. P. Murray, ed., *Plato On Poetry*
: 229.
- 69 『法律』I卷624A

[Abstract]

Plato's Rejection of Mimetic Poetry in Republic X
and the Two Arguments (602C-605C and 605C-607A)

Akira MIKAMI

First, this article continues the examination of Plato's first argument for rejecting mimetic poetry (595B-602B) and shows that his contention that Homer as a mimetic poet, likened to painter, has no true knowledge is valid. Second, it examines Plato's second argument that mimetic poetry has influence over the inferior element of the soul (602C-605C) and shows its significance in relation to the tripartite theory of the soul. Third, it examines his third argument which concerns the power of assimilation that mimetic poetry has (605C-607A) and shows its significance in view of the fact that "the good men" in 605C refers to the candidates for philosopher-rulers.